

2018（平成 30）年度

2 回生進級時アンケート報告書

京 都 大 学 国 際 高 等 教 育 院

目 次

1	調査の概要と目的	1
2	回答者の属性と回答率	2
3	志望意識と専門分野	4
4	学習意欲	8
5	大学教育での向上感	12
6	ILAS セミナーの受講	16
7	履修動向と成績	22
8	成績評価への納得度	27
9	学生生活	30
10	学生の期待と実現度	36
11	教養・共通教育についての意見	43
12	まとめ	48
	【資料】平成30年度2回生進級時アンケート	50

1. 調査の概要と目的

2回生進級時アンケートは、2003年度入学者を対象として2004年4月に初めて実施され、以来、15年に亘って学生の学習活動についての意識変化を追跡してきた。初期においては紙を媒体とした調査を行っていたが、2007年度からは京都大学で整備された教務情報システム（KULASIS）による回答方法を採用している。毎年の調査結果は国際高等教育院のホームページに掲載し、学内外に公表されている（URL：<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/introduction/inspection>）。

本調査の第一の目的は、学生が入学後1年間の大学生活を振り返って、京都大学の教育、特に教養・共通教育に対してどのように取り組み、どのような感想を抱いているか、について2回生進級時点での意識調査を行い、今後の京都大学の教育を改善・充実するための基礎資料にすることである。

本調査の第二の目的は、京都大学の教育活動に対する検証である。大学機関別認証評価 大学評価基準（第3期）では、基準6-4、6-6、6-8 のそれぞれにおいて、「適切な授業形態、学習指導法が採用されていること」「公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されていること」「適切な学習成果が得られていること」が謳われており、これを受けて京都大学の第三期中期計画 計画番号9において、「授業評価アンケートや、卒業生・修了生、就職先等関係者へのアンケート等の実施により学生等の意見を聴取し、教育改善に活用する」としている。このためには、入学時から卒業時に至るいくつかの定点で、学生意識の変化を調査することが必要であり、本アンケートはそのような検証の一環として有用な質問を設けている。

調査対象： 学部新2回生（2017年度入学生）全員

実施期間： 2018年4月2日～6月6日

調査方法： KULASIS上でのアンケート回答方式をとっている。上記の調査期間に各学部新2回生が履修登録確認のためKULASIS にログインした際にアンケートへの協力願いを掲示し、回答フォームに入力するという方式を採用した。アンケート全文は末尾に添付している。

注1) 文理の区分について、本報告書において総合人間学部は集計の都合上、文系に含まれている

注2) 未回答は回答数より除かれている

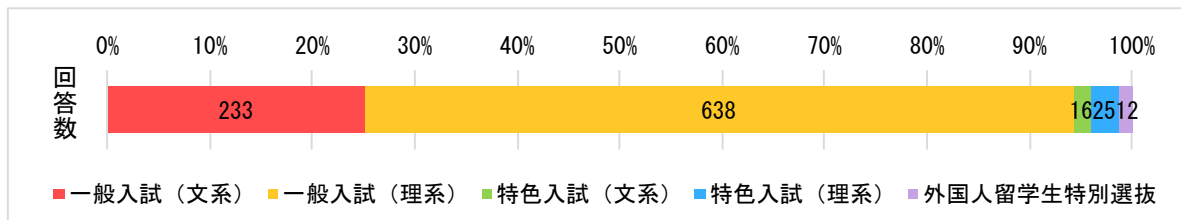
2. 回答者の属性と回答率

最初に回答者の属性に関する質問をし、アンケート全体での区分解析を可能にした。特に昨年度から、学部別に加えて、一般入試入学者（文系・理系）、特色入試入学者（文系・理系）、留学生の区分を設け、必要に応じて解析区分として採用した。

Q.01 あなたが京都大学に入学した入試区分は次のどちらですか。

- ①一般入試（文系） ②一般入試（理系） ③特色入試（文系） ④特色入試（理系）
⑤外国人留学生特別選抜

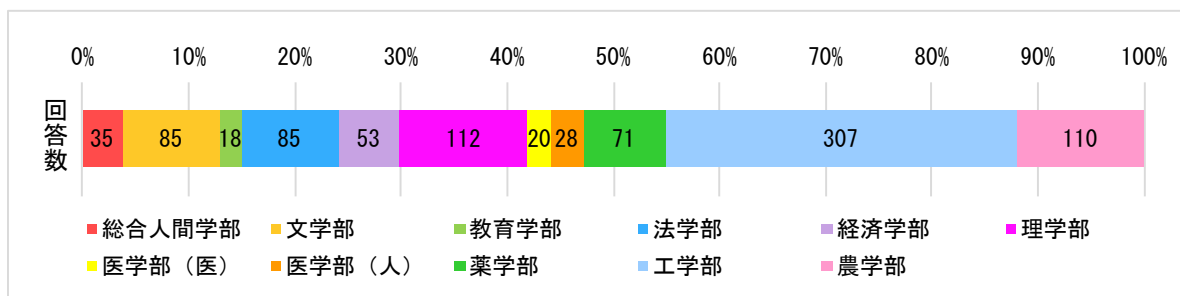
<図 1 >



Q.02 あなたの学部を教えてください。

- ①総合人間学部 ②文学部 ③教育学部 ④法学部 ⑤経済学部 ⑥理学部 ⑦医学部（医学科）
⑧医学部（人間健康科学科） ⑨薬学部 ⑩工学部 ⑪農学部

<図 2 >



注) 薬学部は集計の都合上、薬学科、薬科学科を合算している

<表1 学部別アンケート回答者数・回答率>

学部	計	回答者数	回答率	文理
総合人間学部	124	35	28.23%	27.54%
文学部	224	85	37.95%	
教育学部	61	18	29.51%	
法学部	340	85	25.00%	
経済学部	253	53	20.95%	
理学部	315	112	35.56%	34.12%
医学部	215	48	22.33%	
薬学部	86	71	82.56%	
工学部	973	307	31.55%	
農学部	310	110	35.48%	
合計	2,901	924	31.85%	

(2018/5/1 現在 編入生は除く)

学部別のアンケート回答者数ならびに回答率を表1に示す。各学部に2回生ガイダンス等でアンケート調査に協力をお願いし、またKULASISにて再々回答を促した結果、本年度の回収率は31.8%(924名)となり、昨年度の21.4%より10ポイント以上向上した。ただし、なお学年在籍者3人に1人の回答に基づいた解析ではデータの信頼性という観点、さらには教育改善への取組という意味においても大いに問題であり、来年度以降も継続して改善策を講じる必要がある。

<表2 学部別アンケート回答率の変遷>

	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	(*)平均回答率
総人	30.1%	30.6%	36.7%	57.8%	59.2%	48.0%	54.5%	37.7%	22.5%	34.7%	20.0%	31.2%	15.7%	28.2%	25.1
文学	26.9%	25.6%	28.6%	50.5%	50.2%	49.8%	49.8%	41.3%	23.7%	30.4%	29.8%	28.9%	29.6%	37.9%	32.1
教育	34.9%	29.2%	35.5%	37.7%	37.7%	44.3%	42.6%	32.8%	23.3%	26.2%	22.6%	17.7%	28.1%	29.5%	25.1
法学	19.3%	16.8%	30.4%	44.1%	44.4%	42.6%	42.4%	30.2%	17.8%	31.7%	25.9%	18.8%	19.2%	25.0%	21.0
経済	14.8%	12.9%	25.4%	37.3%	36.3%	37.5%	42.3%	44.8%	21.3%	31.0%	24.6%	19.8%	14.2%	20.9%	18.3
理学	30.1%	29.9%	38.1%	49.4%	50.2%	58.0%	53.3%	45.9%	29.9%	35.2%	33.2%	28.8%	29.2%	35.6%	31.2
医学	39.7%	25.7%	20.1%	33.3%	37.2%	34.6%	35.3%	32.7%	15.9%	26.4%	22.1%	21.3%	16.9%	22.3%	20.2
薬学	25.8%	19.1%	35.6%	55.2%	57.8%	51.8%	52.3%	56.0%	30.5%	50.6%	34.5%	39.3%	32.2%	82.6%	51.3
工学	74.7%	33.7%	35.5%	45.6%	45.2%	44.5%	50.3%	41.5%	23.2%	36.6%	23.4%	25.4%	20.8%	31.6%	25.9
農学	19.5%	23.8%	34.1%	45.2%	46.1%	46.7%	50.2%	39.6%	26.6%	34.2%	32.8%	23.4%	19.5%	35.5%	26.1
全体	41.8%	26.5%	32.2%	44.9%	45.5%	45.2%	47.7%	40.1%	23.1%	33.9%	26.4%	24.7%	21.4%	31.9%	26.0

(*1)2015年～2017年の3年間の平均提出率

(*2)黄色は回答率上位2学部、青は回答率下位2学部

表2には、2005年度(平成17年度)以降の学部別アンケート回答率の変遷を示した。最近3年間の平均回答率を見ると、30%程度と比較的高い学部(文学、理学、薬学)から、20%程度の低い学部(法学、経済、医学)まで大きな差があり、全体、文系、理系として集計するときは、回答率の差により影響を受けることに留意されたい。今年各学部の協力もあり回答率が大きく改善した。特に、薬学部の回答率が80%を超えている。薬学部で新学期に実施された2回生ガイダンスで積極的に回答を促していた結果であり、今後の改善策を考える上で大いに参考になる。

3. 志望意識と専門分野

大学はホームページやパンフレット、オープンキャンパス等のさまざまな媒体により、各学部の学術分野、教育内容、学生生活等を広報し、入学者に期待する資質をアドミッションポリシーとして公開している。入学試験という関門を通過して京都大学の各学部に入学者は自らが志望する分野を選択しているはずであるが、将来の活躍分野をどこまで具体的に意識しているか、またそれが学習の動機付けに結びついているか、は入学後の教育効果を大きく左右するものと思われる。つまり、

志望 → 学習意欲 → 学習行動 → 学習成果 → 向上感（満足度）

の正の連鎖を期待する。一方、その志望意識とこれから学ぶことになる専門分野との一致度が良くない場合は、負の連鎖を起こす恐れがある。アンケートの初めにこの重要点について Q.03～Q.06 で把握し、以後の学習行動や学習成果との相関を考察した。

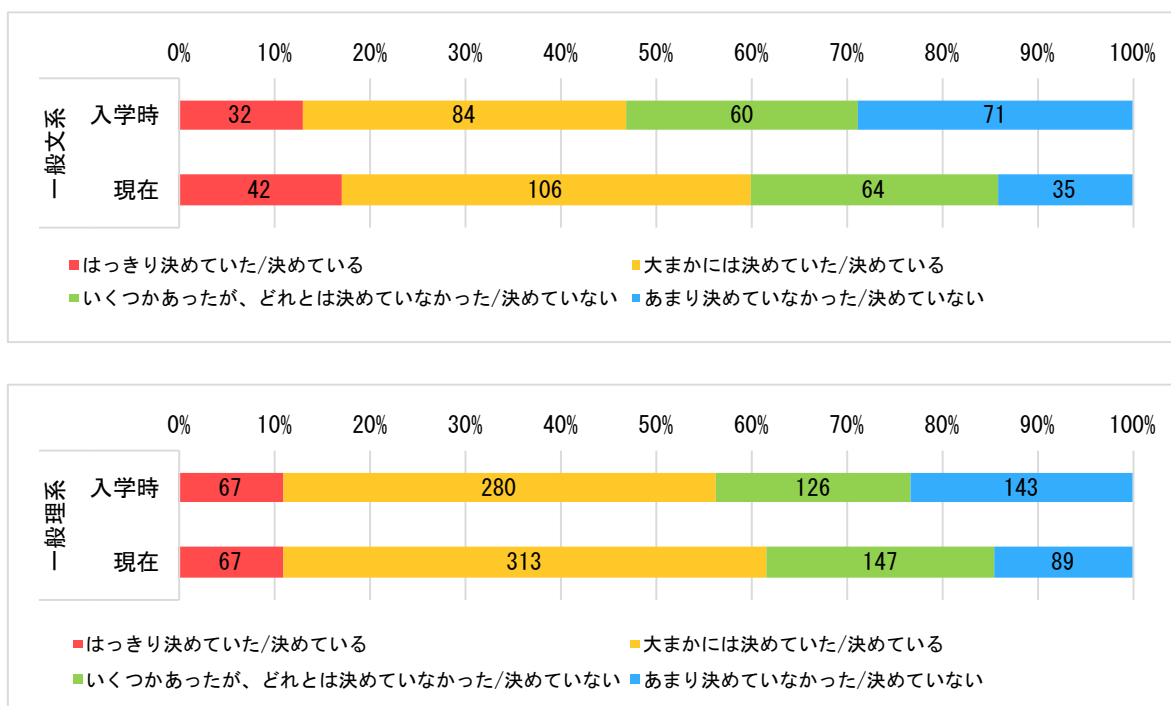
Q.03 あなたが入学したとき、自分が将来活躍したい分野（希望分野）を決めていましたか。

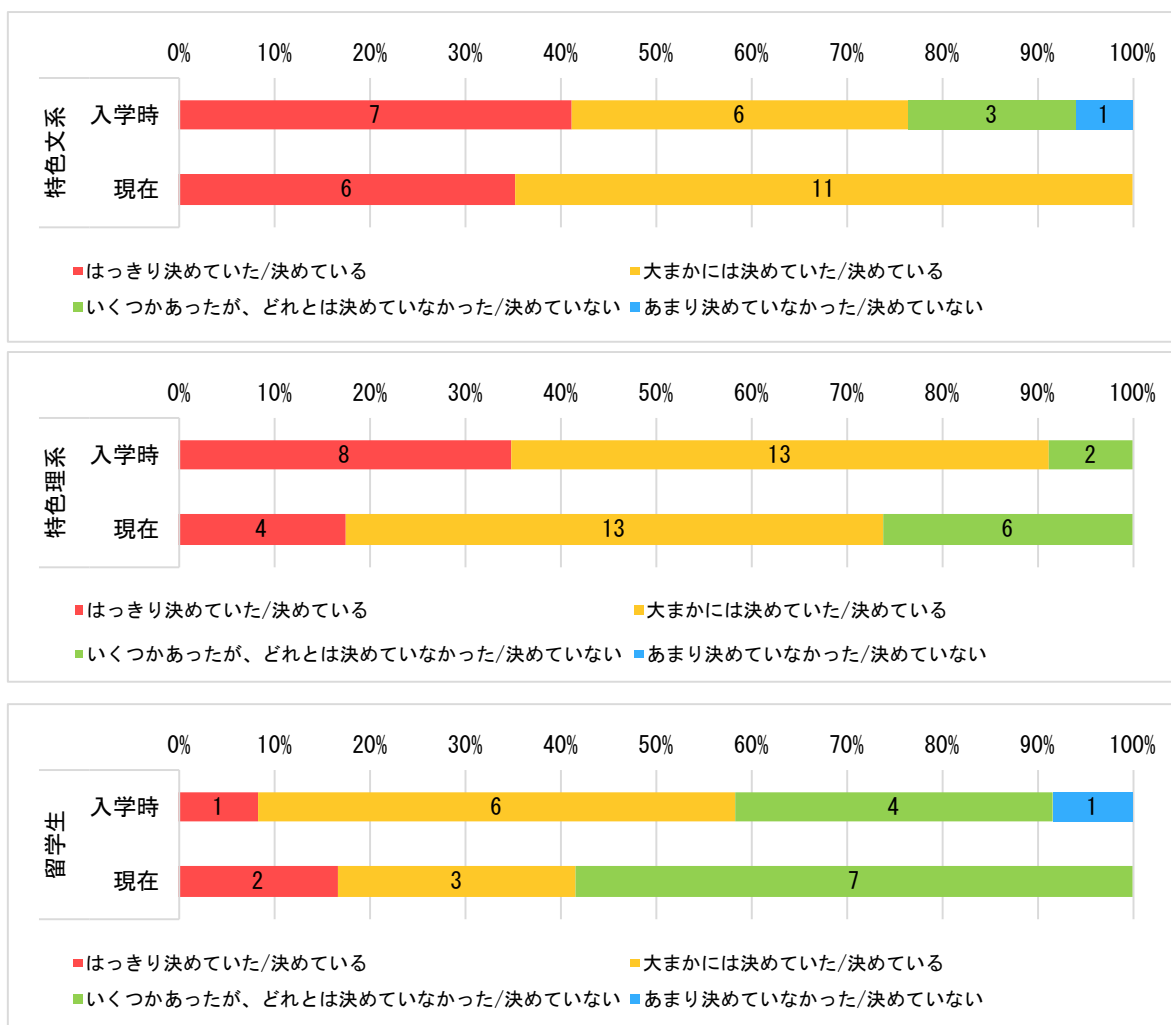
- ①はっきり決めていた ②大まかには決めていた ③いくつかあったが、どれとは決めていなかった
④あまり決めていなかった

Q.04 今現在、自分が将来活躍したい分野（希望分野）を決めていますか。

- ①はっきり決めている ②大まかには決めている ③いくつかあるが、どれとは決めていない
④あまり決めていない

<図3 志望意識・入試区分別>





Q.03 と Q.04 は入学時と1年後の現在で、志望意識を尋ねた質問である。平均として、文系、理系とも10～15%の「はっきり決めている」を含む約60%の学生が将来活躍したい分野を「(大まかには) 決めている」。また、約15%は現在でも「あまり決めていない」と答えている。専門分野の中で具体的な活躍分野がイメージできていないということかも知れないが、専門分野そのものに志望意識をもてない場合は、今後の勉学のモチベーションを保てるかという不安が残る。この点は Q.06 で確かめることになる。

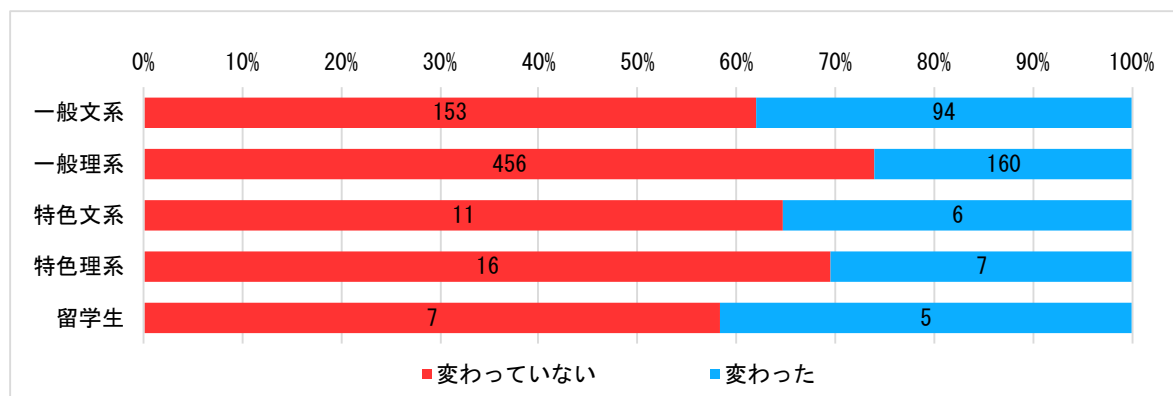
Q.03 と Q.04 の比較により、全体として、1年後の現在の方が「はっきり決めている」と「大まかには決めている」の回答合計が（文系：48→60%、理系：57→61%）増加し、「決めていない」が（文系：29→14%、理系：23→14%）と減少していることは、入学後に次第に志望意識が明確になるという好ましい傾向を示している。昨年と比較して、「(大まかには) 決めている」学生の比率が若干増加している。

一般入試と特色入試の入学者を比較すると、「(大まかには) 決めている」の比率が特色入試区分では大きくなっており、特色入試制度の趣旨を反映した結果である。ただし、特色入試では回答数が少なく、統計的に有意な結果とは言い難い。同じく留学生の区分のデータも回答数が少ないので明白ではないが、入学時より現在の方が、志望意識が揺らいでいるという傾向が示唆されていることは気がかりである。

Q.05 入学してから現在までに、その希望分野は変わりましたか。

①変わっていない ②変わった

<図4 希望分野の変化・入試区分別>



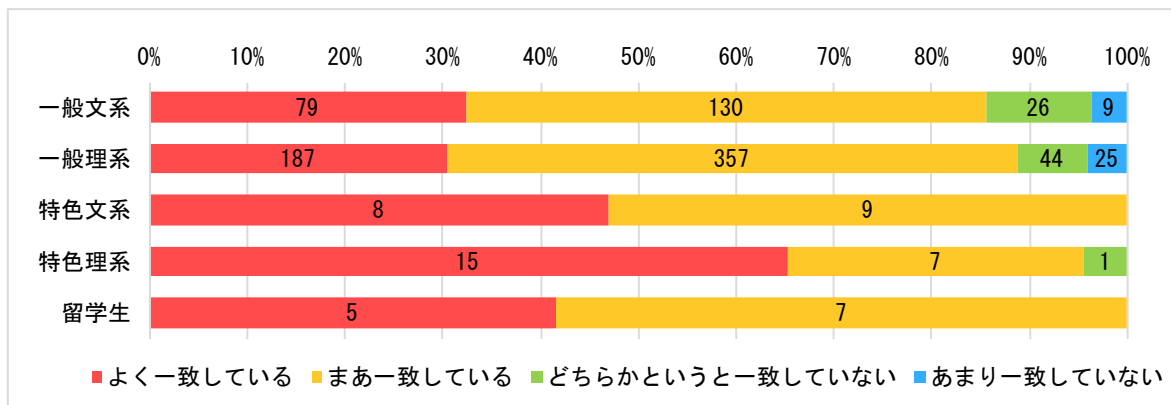
Q.05 では、1年間の大学生活を経て、志望分野が変化したかどうかを問うている。

図4に入試区分別の結果を示したが、文系と比較して理系学生では志望変化が少ないことが分かる。文系学部で40%近い学生が「変わった」と答えている。これらの学部では将来の活躍分野に多様性がより大きく、学生が1年間の学部教育や学生生活を過ごす間に次第に将来の方向性を定めてきたように解釈される。昨年と同様に留学生の区分では、「変わった」と答えた学生の比率が相対的に大きい。来日してから多くの情報を得て、将来に向けたイメージが浮かび易くなったものと推察される。

Q.06 現在のあなたの希望分野と学部でこれから学ぼうとする専門分野は、どの程度一致していますか。

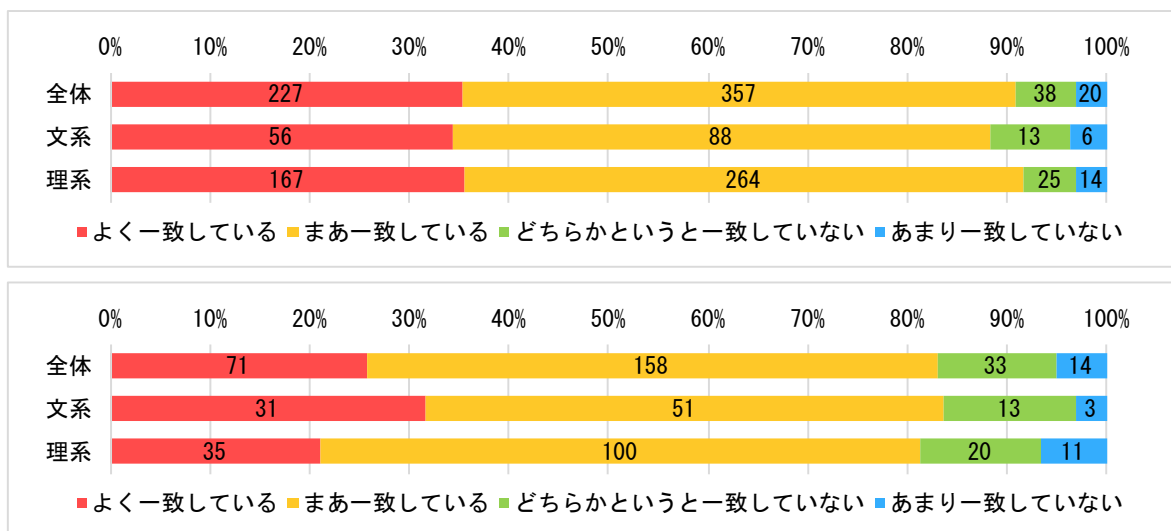
- ①よく一致している ②まあ一致している ③どちらかという一致していない
④あまり一致していない

<図5 希望分野と専門分野の一致度・入試区分別>



1年間の学習経験と大学生活を経て、自らの希望分野とこれから学ぼうとする専門分野との一致度について学生がどのように思っているか、を尋ねた。この段階で「どちらかという一致していない」、「あまり一致していない」は好ましくない回答であるが、一般入試の文系・理系ともその比率は10数%にとどまり、大半の85%を超える学生が「よく一致している」、「まあ一致している」と回答している。

<図6 上：希望分野が「変わっていない」と回答した学生、下：「変わった」と回答した学生>



次に、Q.05で希望分野が「変わっていない」と「変わった」と答えた学生の区分について一致度の解析を行った。

「変わっていない」と答えた学生の専門一致度は高く、90%に達している。一方、「変わった」と答えた学生の区分でも「(まあ)一致している」の回答が文系、理系とも80%以上であることから、より一致度が良くなる方向に学生の意識が変化していることを示している。この傾向は昨年度と同様であり、数値としては昨年度より向上している(75%→82%)。

4. 学習意欲

Q.07 入学当初から現在までに、あなたの学習意欲はどのように変化しましたか。各時期について、次の5つから選択してください。なお、この質問は Q.7～Q.11（入学当初、前期半ば、後期開始、後期半ば、現在）まであります。

<入学当初の時期>

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.08<前期半ばの時期>

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.09<後期開始の時期>

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

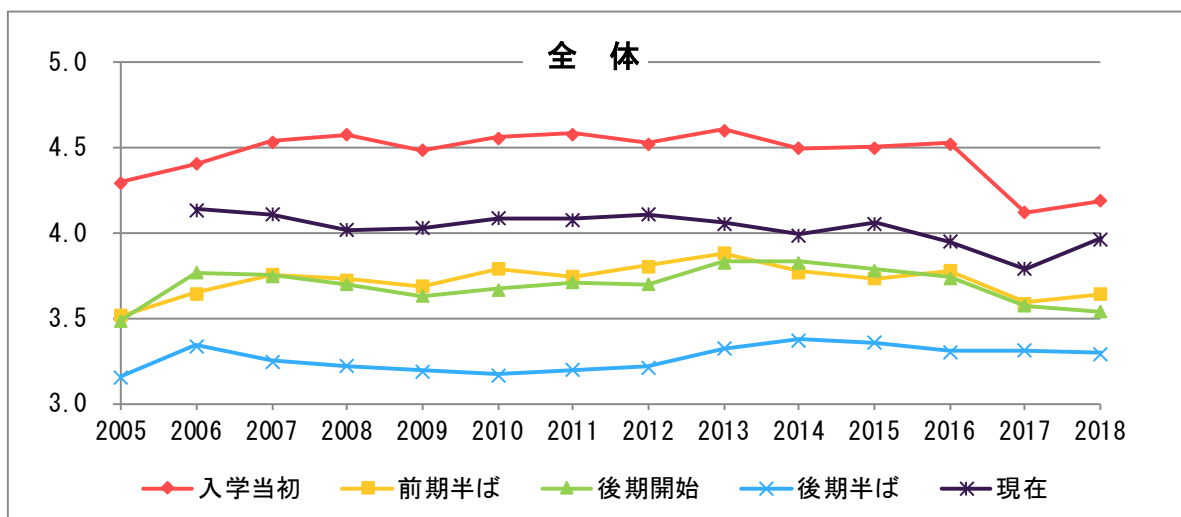
Q.10<後期半ばの時期>

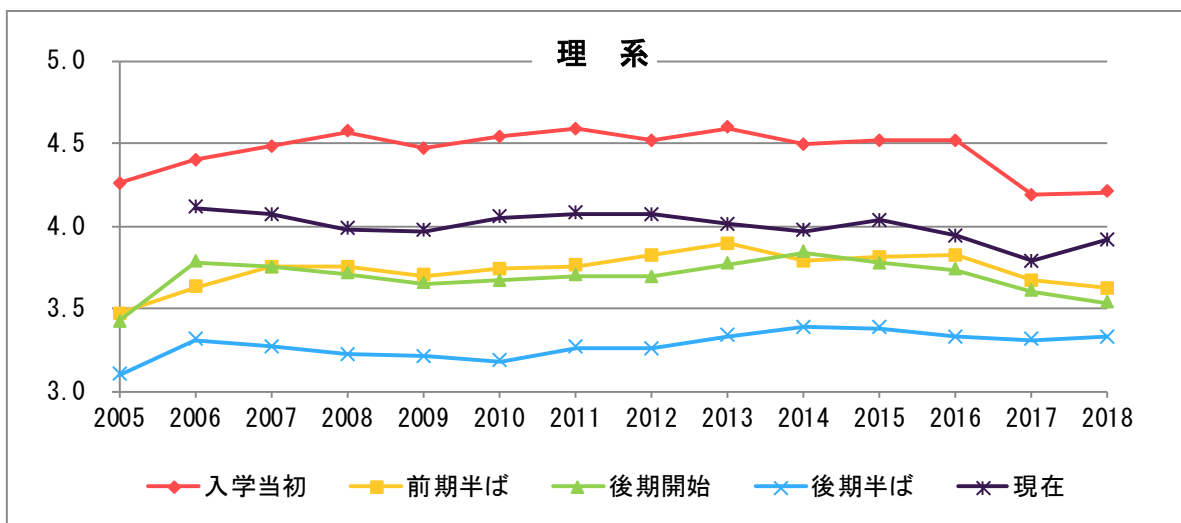
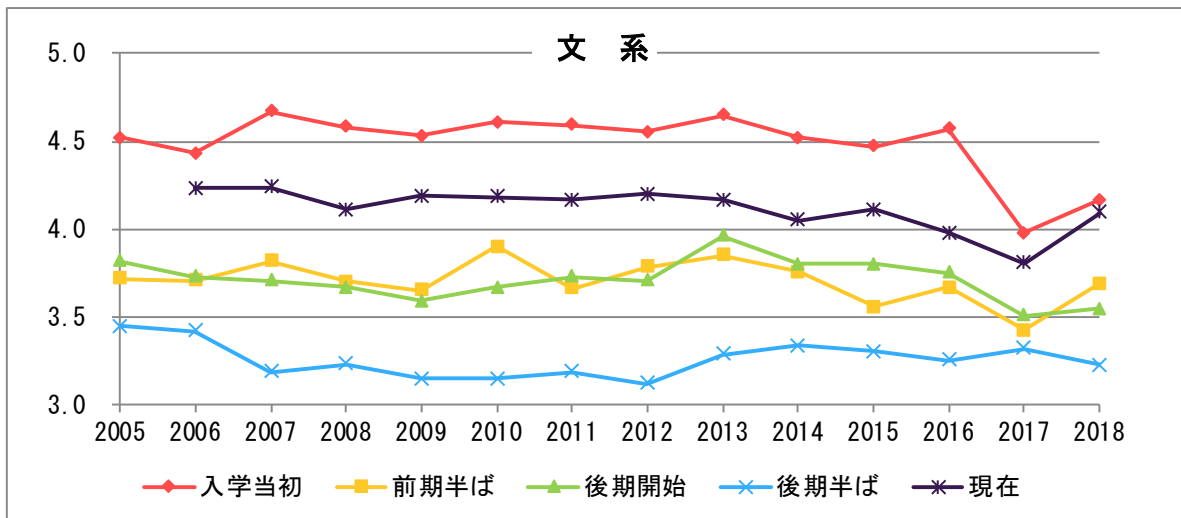
- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.11<現在>

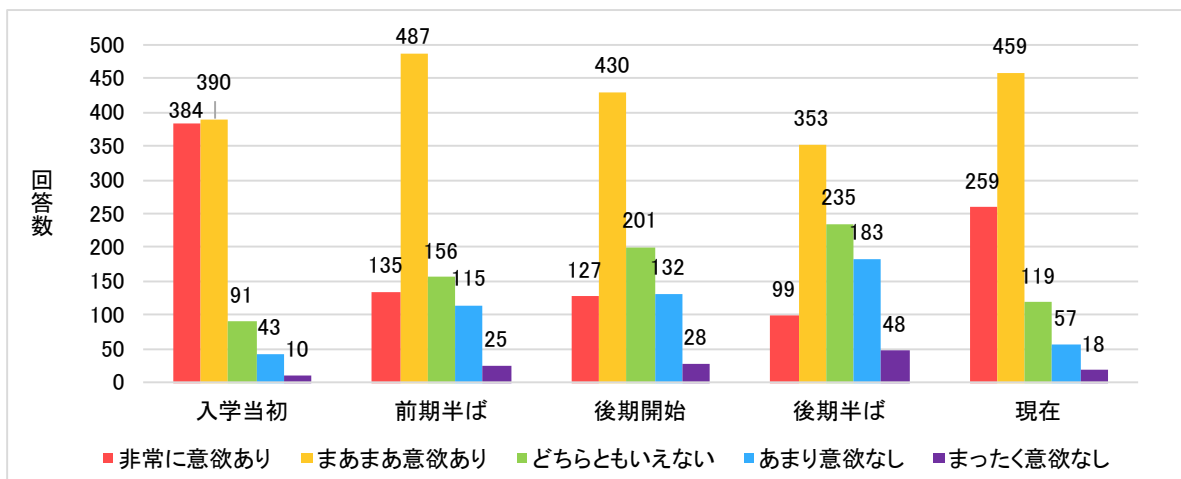
- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

<図7 学習意欲の経年変化（2005-2018年）>





< 図 8 学習意欲の変化 回答分布 (2018年：全体) >



学習意欲については、これまでのアンケートでも同じ質問をして継続的に調査している。経年変化を見るために、学習意欲を数値化してその平均点を各時期（入学当初、前期半ば、後期開始、後期半ば、現在）

についてプロットした。

数値化については、「①非常に意欲あり」を5とし、最後の「⑤まったく意欲なし」を1とした。

入学当初の高い学習意欲から、次第に低下して後期半ばで底になり、2回生新学期で回復するという傾向は長年同じである。また、文系、理系で見てもその数値に大きな変化はない。図8においても、赤の「非常に意欲あり」が前期半ばで激減するのは致し方ないとしても、青の「あまり意欲なし」が時間を追って着実に増加するのは嘆かわしい傾向である。今年の調査で一つ良い結果は、2回生進学時（現在）の意欲回復が見られることである。特に文系にその傾向が著しく、入学当初の値まで回復しているのは喜ばしい。また、昨年2017年度調査で、入学当初の意欲値が以前より大きく低下していた理由は、それまでは学生が回答するに当たり自身が入学時に記入した抱負や期待を読む欄を設けていたので、回想効果があったが、昨年度よりこれを廃止したためと思われる。

<図9 学習意欲の変化・全体比率 上：2017年度、下2018年度>

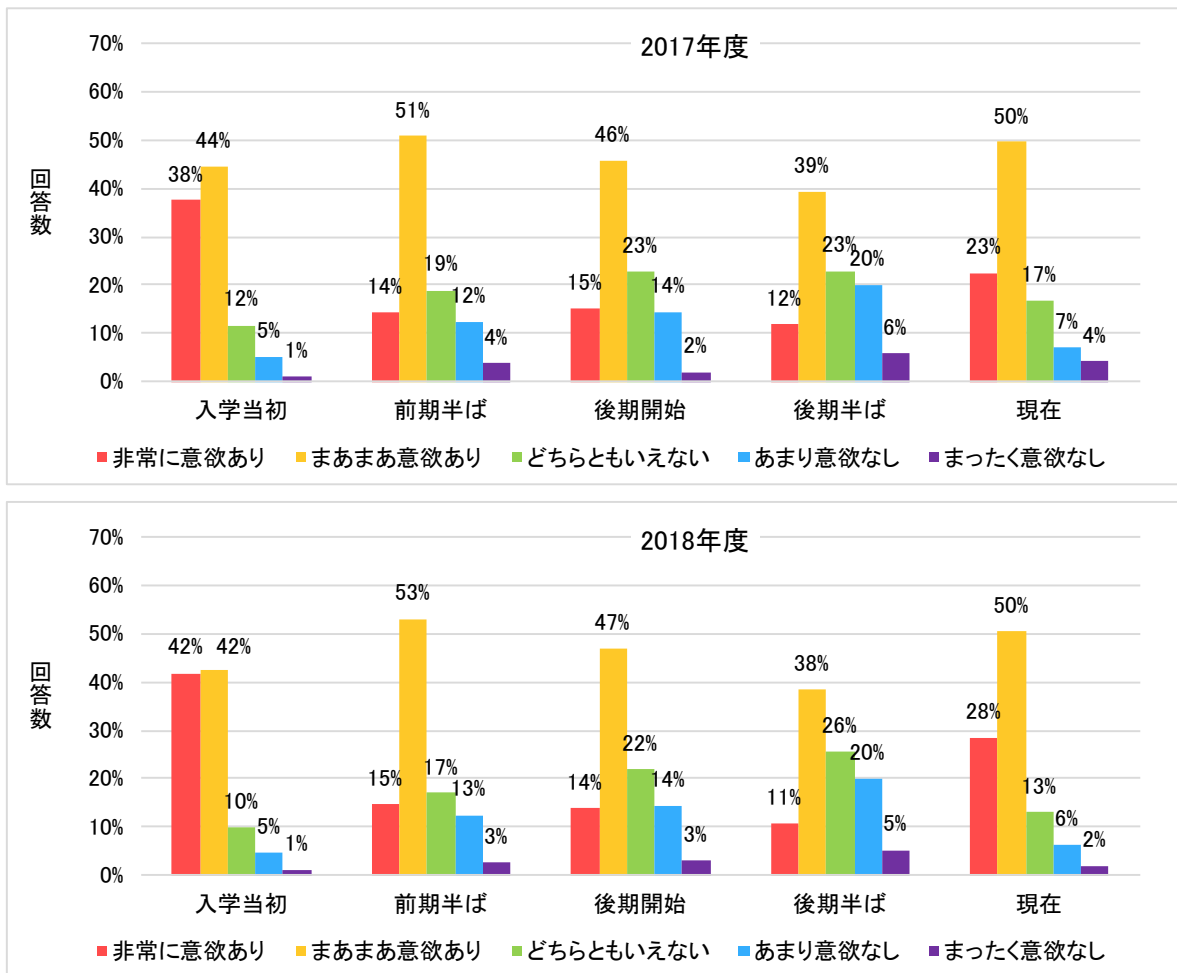
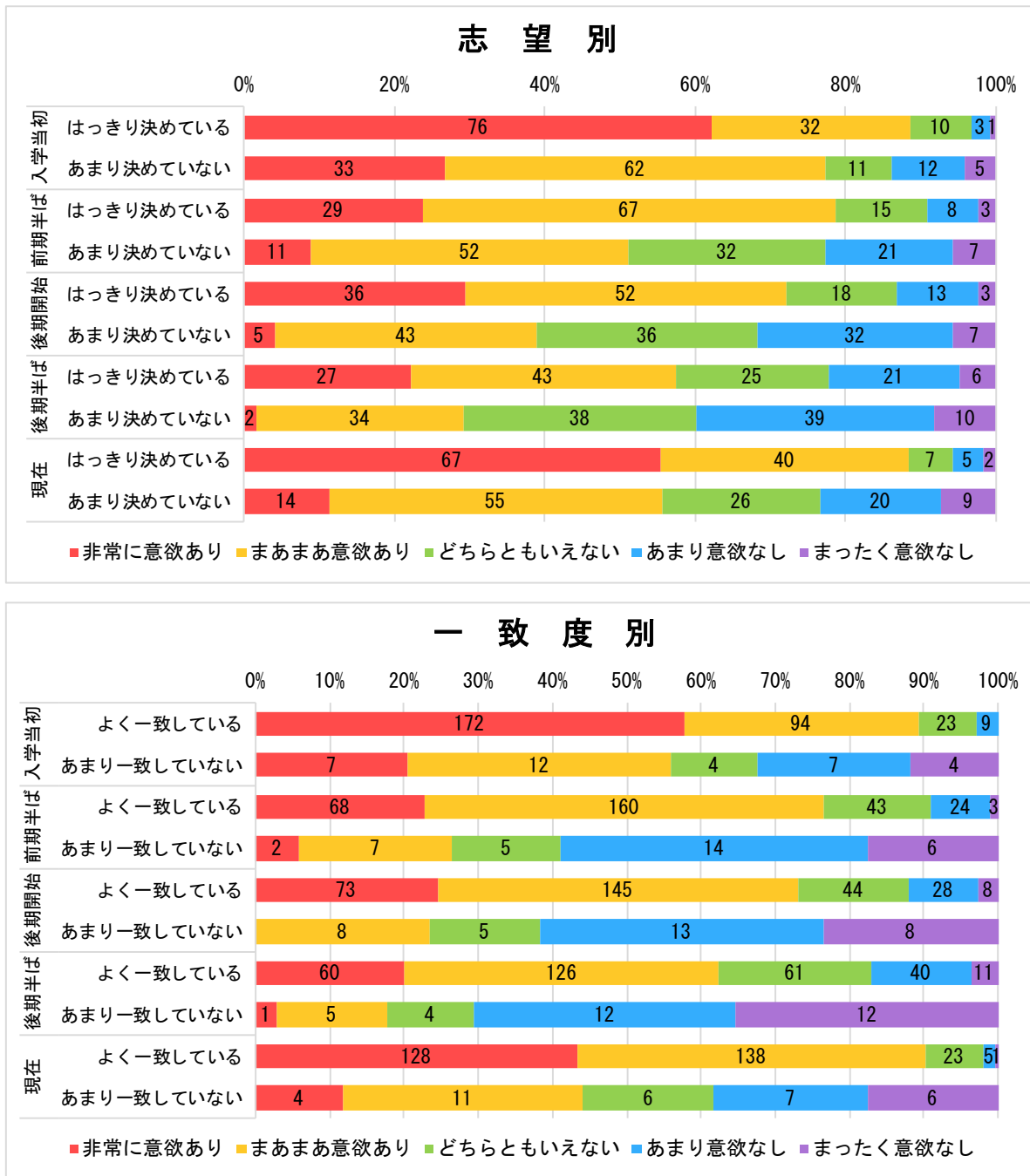


図9は昨年の意欲分布と今年の分布を比較して表示している。全体的には、入学当初の高い学習意欲が次第に低下して後期半ばで底になり、2回生新学期で回復するという傾向を、毎年見事に再現している。

<図10 学習意欲の変化 上：志望別 下：一致度別>



Q.04で「はっきり決めている」と「あまり決めていない」の区分と、Q.06で「よく一致している」と「あまり一致していない」の区分で、学習意欲の変化を表示した。それぞれ志望意識の有無、希望分野と専門分野の一致度が、学生の学習意欲にどの程度の影響を与えているかを検討するためである。

入学後のどの時期においても、志望意識の有無により学習意欲に明確な差がでている。一致度の良否においても学習意欲の差は明白である。特に、「あまり意欲なし」、「まったく意欲なし」の比率が志望意識や一致度が悪い場合は大きく増加する。先に懸念したように、志望 → 学習意欲の悪循環を示す結果である。後述するように、学習意欲の低下は大学生生活全般に波及することであり、今後とも注視して対策を講じていく必要がある。

5. 大学教育での向上感

入学後1年間の大学での授業や活動を経て、学生が自己能力の向上についてどのような意識をもっているかをいくつかの要素能力について質問した。ここで「専門知識の向上」は、全学共通科目や教養教育の範囲ではないので除外し、それ以外の「人間社会や自然についての幅広い視野と教養」、「問題を発見し、論理的に解決法を考える力」、「自分の考えを表現し、相手の意見を理解するコミュニケーション能力」、「自ら考え、主体的に行動する能力」、「英語の能力」の5つの能力について Q.12～Q.16 で尋ねた。これらは多くの学部のカリキュラムポリシーやディプロマポリシーに謳われている項目であることから、学生が卒業するまでに「専門知識の向上」を含めて高い向上感を得られることが、教育効果の検証として重要となる。

Q.12 入学後1年間の授業を受けて、人間社会や自然についての幅広い視野と教養は、どの程度、向上したと思いますか。

①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.13 1年間で、あなた自身が問題を発見し、論理的に解決法を考える力は、どの程度、向上したと思いますか。

①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.14 1年間で、自分の考えを表現し、相手の意見を理解するコミュニケーション能力は、どの程度、向上したと思いますか。

①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.15 1年間で、自ら考え、主体的に行動する能力は、どの程度、向上したと思いますか。

①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.16 1年間で、あなたの英語の能力はどの程度、向上したと思いますか。

①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

< 図 1 1 大学教育での向上感 文理別 >

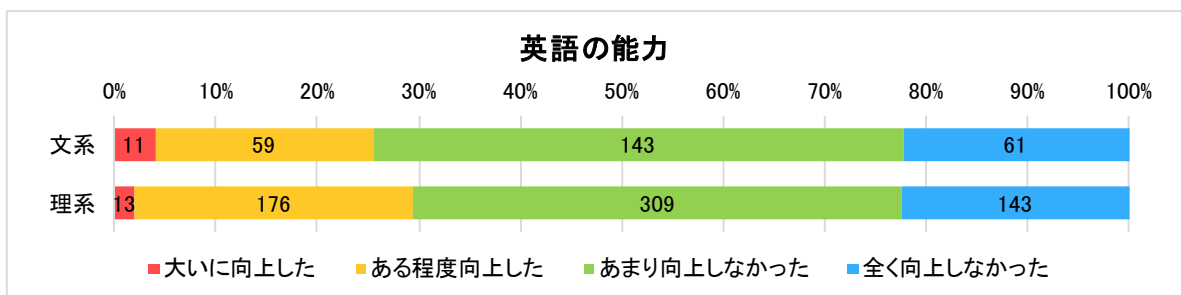
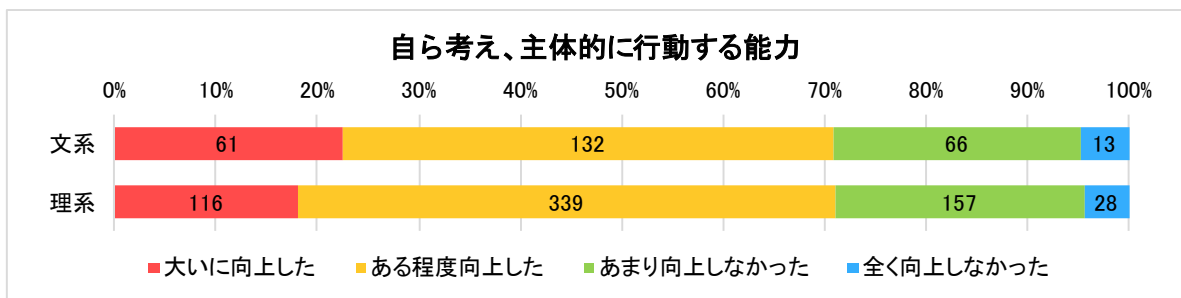
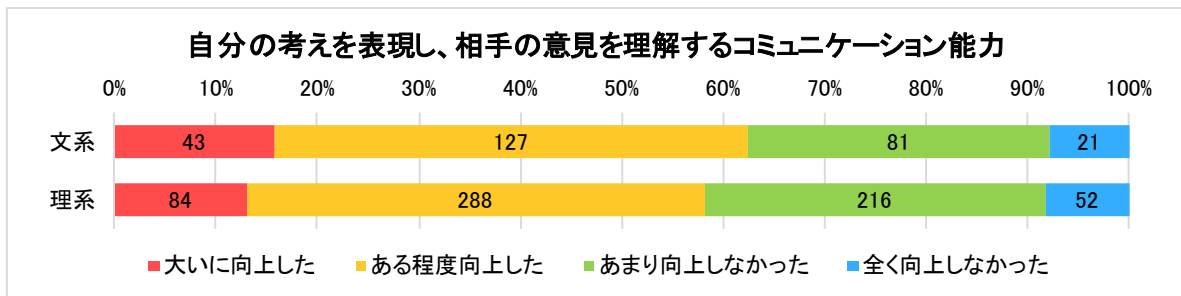
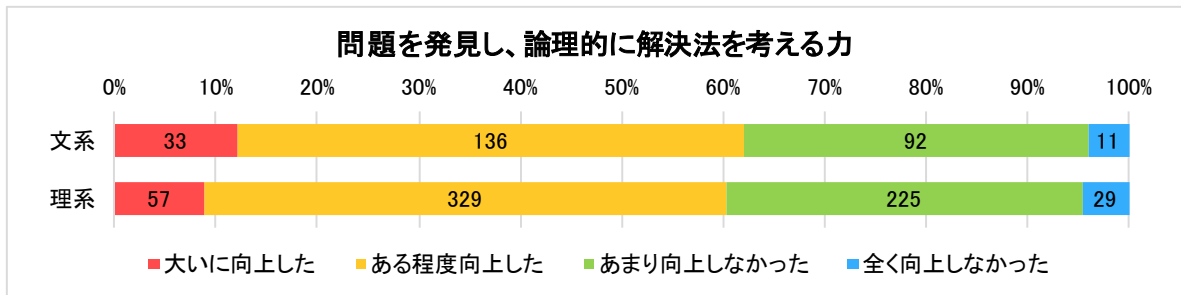
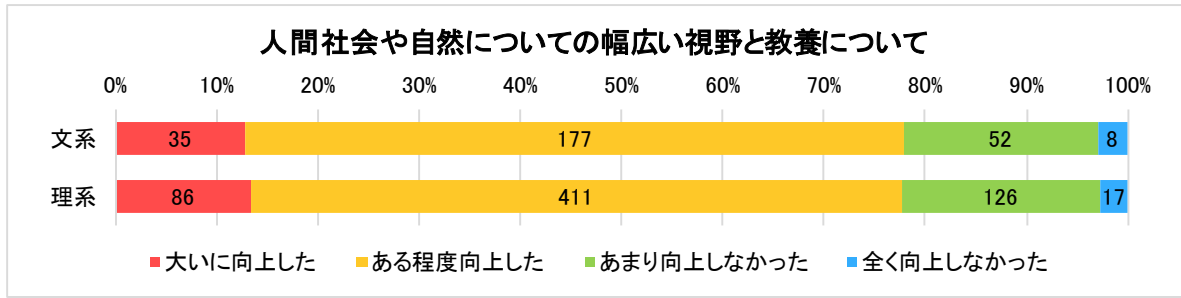


図 11 は各要素能力について文系・理系別の回答比率を図示している。概観すると、「大いに向上した」、「ある程度向上した」の肯定的意見の比率は、

「人間社会や自然についての幅広い視野と教養」：平均約 78%(昨年：77%)

「問題を発見し、論理的に解決法を考える力」：平均約 61%(昨年：61%)

「自分の考えを表現し、相手の意見を理解するコミュニケーション能力」：平均約 59%(昨年：58%)

「自ら考え、主体的に行動する能力」：平均約 71%(昨年：69%)

「英語の能力」：平均約 28%(昨年：29%)

であった。

教養・共通教育としては、「幅広い視野と教養」と「主体的能力」の向上感が高いことは良い結果であるが、しかしながら 2016 年度入学生から E 科目の改革を進めているにも関わらず、「英語能力」についての向上感が昨年同様に低いことは残念な結果となっており、授業改善のみならず、英語への関心や英語に触れる機会の増加、向上感、達成感が得られる仕組みについてさらなる検討が必要である。

なお、参考資料として、2017 年度卒業生（多くは 2014 年度入学生）に対して尋ねた同様の質問について、以下に転載している。2 回生進学時アンケート結果と類似の傾向であるが、英語の能力については平均として 10 ポイント程度、卒業時の意識としては向上している。2016 年度入学生から実施した英語改革がどのような効果を表すか、これから数年間の多面的な継続調査の結果を待ちたい。

【参考資料】2017 年度卒業生進路調査アンケート結果より転載

全学共通科目の学習を振り返って、入学当初と比べて以下の項目はどの程度向上した又は得られたと思いますか。

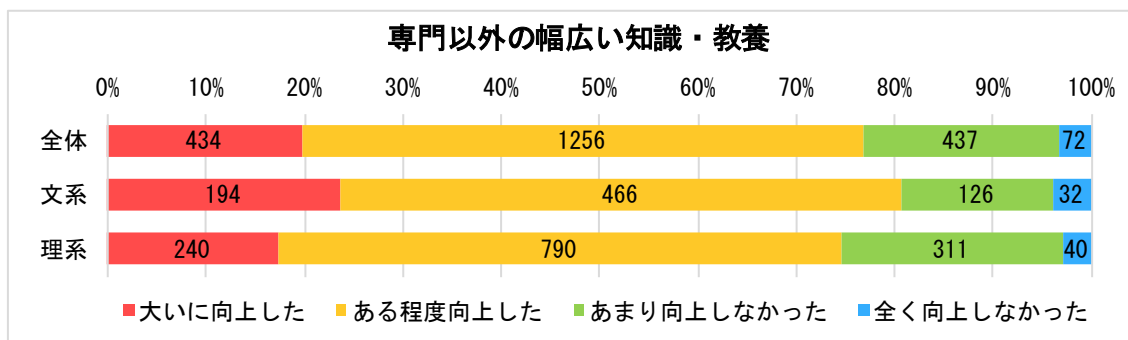
(1) 専門以外の幅広い知識・教養

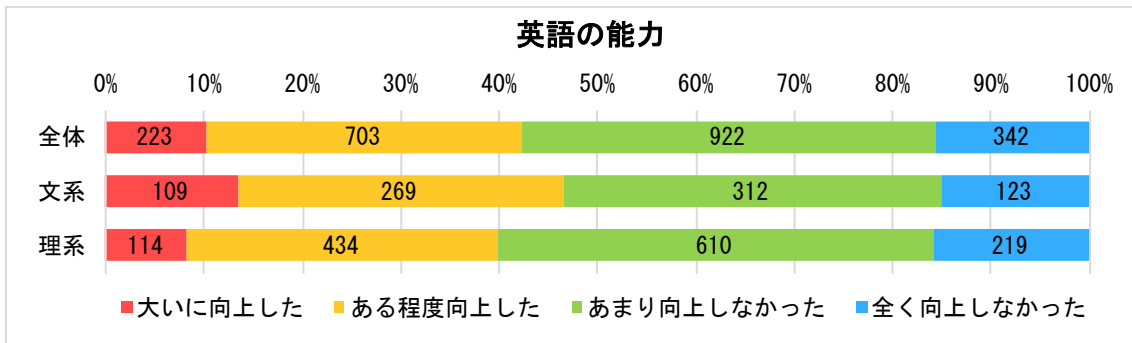
①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

(3) 英語の能力（英語以外の言語を第 1 外国語とした方は、その言語の能力）

①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

<図 1 2 大学教育での向上感 2017 年度卒業生対象>





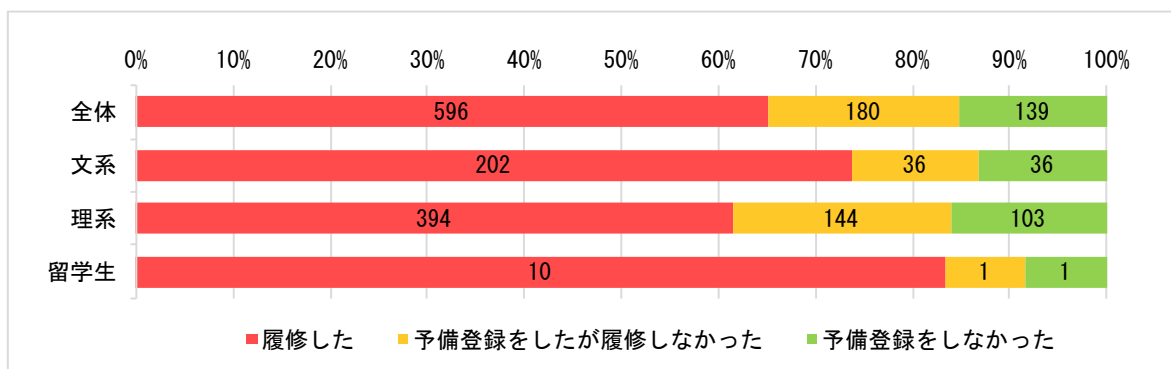
6. ILAS セミナーの受講

昨年度より、ILAS セミナーに関する質問を、2 回生進級時アンケートに追加した。1998 年度に始まる少人数ゼミは、開始以来開講数が大幅に拡大して現在の ILAS セミナーに至っている。ILAS セミナーは、主に新入生を対象に、「ILAS セミナー」、「ILAS Seminar-E2」、「ILAS セミナー（海外）」の 3 種類を開講しており、各学部・研究科・研究所・センター等の教員が、Face to Face の親密な人間関係の中で、様々なテーマを扱った少人数ゼミナール形式の授業として企画され、入学当初の重要な初年次教育と位置づけられている。2018 年度においては、267 科目が開設され、受講定員 3,077 名、受講申し込み者数 2,546 名、受講許可者数 2,242 名であった。入学者の約 76%がいずれかの科目の受講許可を得ている。入学者に対する受講申し込み率、申し込み者に対する受講決定率は開講科目数の増加とともに向上したものの 86~88%前後で停滞しており、結果として入学者に対する履修登録率は約 70%となっている。その理由を調査して今後の改善策を検討することが目的である。

Q.17 1 回生で ILAS セミナーを履修しましたか。

①履修した ②予備登録をしたが履修しなかった ③予備登録をしなかった

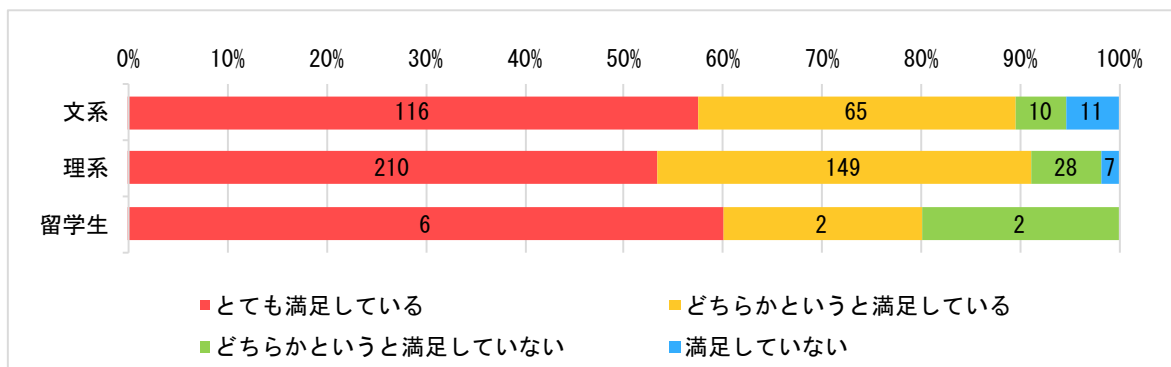
<図 1 3 ILAS セミナーの受講>



Q.17 では、受講の有無を尋ねた。「ILAS セミナー」では少人数ゼミという性格上、最小 5 名から最大 15 名までの定員を設けている。第 3 希望までの予備登録を行い、抽選により履修許可を出している。全体の 20%が予備登録をしたのに履修していない。また 15%が予備登録そのものをしなかった。文系と理系を比較すると、理系の方が履修率が低くなり（文系：74%、理系：61%）、「予備登録をしたが履修しなかった」という回答が約 22%もあるという結果であった。その理由については Q.19 で問うことにする。

- Q.18** Q.17 で「履修した」を選んだ方へ：セミナーで学習した知識や経験について満足していますか。
 ①とても満足している ②どちらかという満足している ③どちらかという満足していない
 ④満足していない

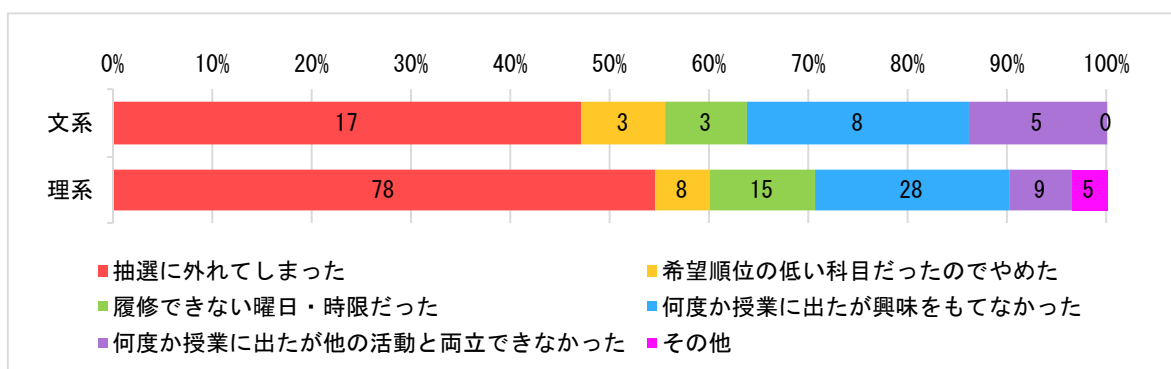
<図 1 4 ILAS セミナー履修者の満足度>



Q.18 では、ILAS セミナーを履修した学生の満足度を尋ねた。図に示したように、「とても満足」と「どちらかという満足」を合わせると約 90%の学生が学習内容に満足しているという結果である。

- Q.19** Q.17 で「予備登録をしたが履修しなかった」を選んだ方へ：履修しなかった理由は何ですか。
 ①抽選に外れてしまった ②希望順位の低い科目だったのでやめた ③履修できない曜日・時限だった
 ④何度か授業に出たが興味をもてなかった ⑤何度か授業に出たが他の活動と両立できなかった
 ⑥その他（記述回答）

<図 1 5 ILAS セミナー：予備登録したが履修しなかった理由>



この設問で「予備登録をしたが履修しなかった」理由を問うた。その結果、理系では半数以上の学生が「抽選に外れてしまった」ことを理由に挙げた。Q.17 で理系の履修率が文系と比較して減少(文系:74%、理系:61%)した理由はおそらくこの点にある。理系学生の好む科目数が学生数に対して少ないため競争率が上がっている、あるいは理系学生により幅広い分野のセミナー受講をもっと推奨すべきなど、理由に応じた対策を考える必要がある。348名の抽選外れが出た2017年度の状況(5名定員41科目中30科目で定員オーバー、当選者のうち第二希望当選者236名、第三希望当選者165名)を基に直ぐに適用

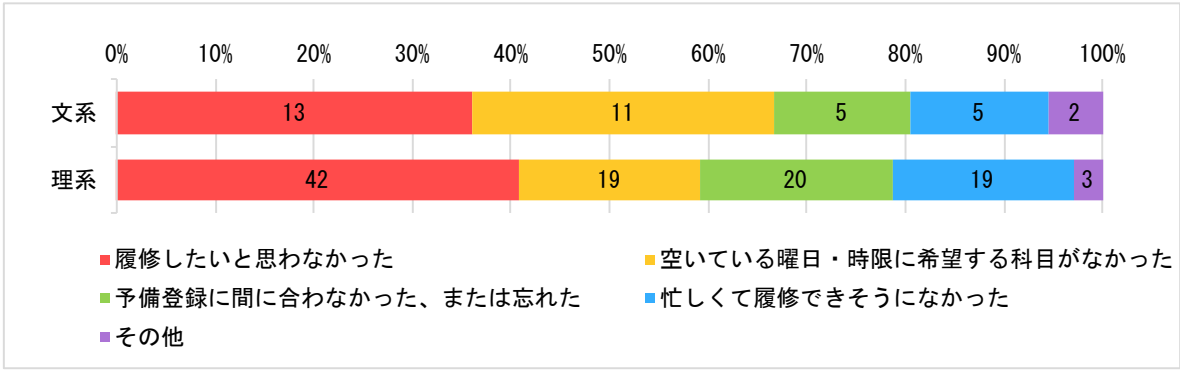
できる策として、ILAS セミナーの最低定員を5名から6名に増やす、予備登録の希望候補を3科目から5科目に増やして抽選する等の具体策が考えられる。

次に多い理由は「何度か授業に出たが興味をもてなかった」であった。昨年の「履修できない曜日・時限であった」と入れ替わった。

Q.20 Q.17で「予備登録をしなかった」を選んだ方へ：予備登録をしなかった理由は何ですか。

- ①履修したいと思わなかった
- ②空いている曜日・時限に希望する科目がなかった
- ③予備登録に間に合わなかった、または忘れた
- ④忙しくて履修できそうになかった
- ⑤その他（記述回答）

<図16 ILAS セミナー：予備登録をしなかった理由>

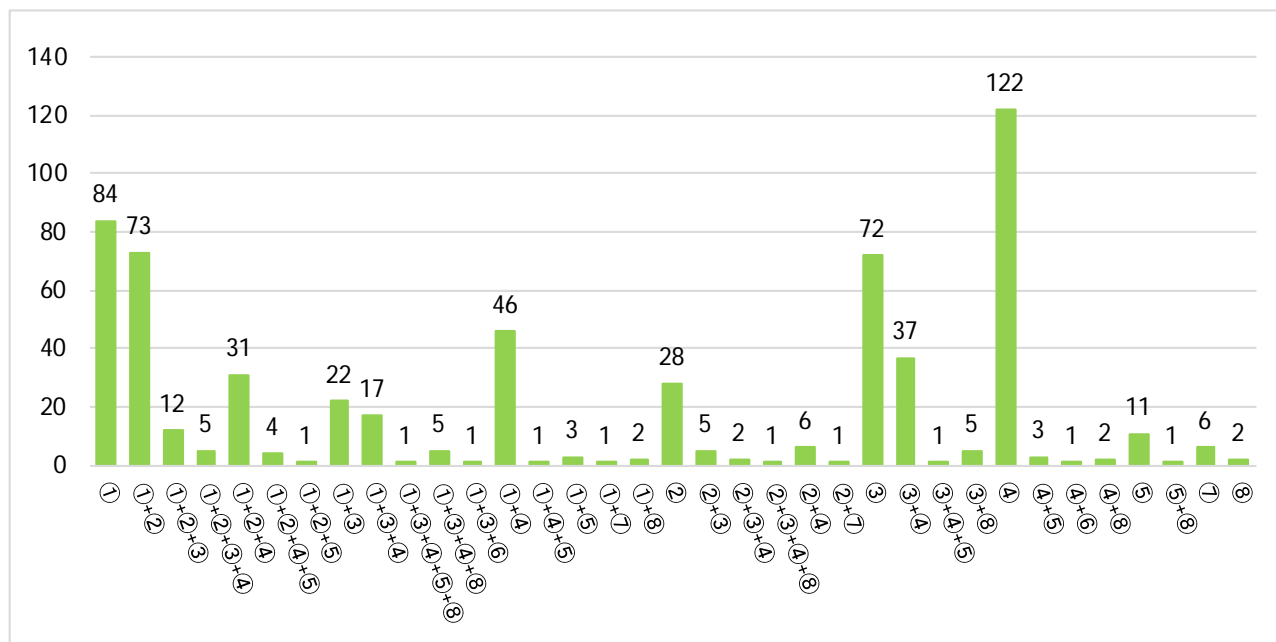


「予備登録をしなかった」学生に理由を尋ねた結果、「履修したいと思わなかった」「空いている曜日・時限に希望する科目がなかった」の回答が60%である。Q.17で予備登録をしなかった学生の比率が全体の15%であったことを考慮すると、入学者の約6%は「履修したいと思わなかった」と回答しており、ILAS セミナーそのものに関心をもっていないことになる。

Q.21 スポーツ実習 IA・IB、物理学実験、基礎化学実験、生物学実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、地球科学実験のうち、1回生で履修した科目に□チェックをつけてください（複数可）。いずれも履修しなかった人はチェックをせずに次の質問へ進んでください。

- ①スポーツ実習 IA ②スポーツ実習 IB ③物理学実験 ④基礎化学実験
 ⑤生物学実習Ⅰ ⑥生物学実習Ⅱ ⑦生物学実習Ⅲ ⑧地球科学実験

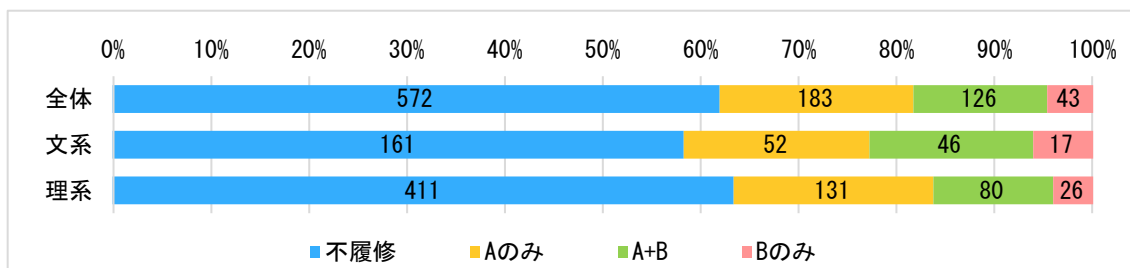
<図17 回答数と履修した科目の組み合わせ>



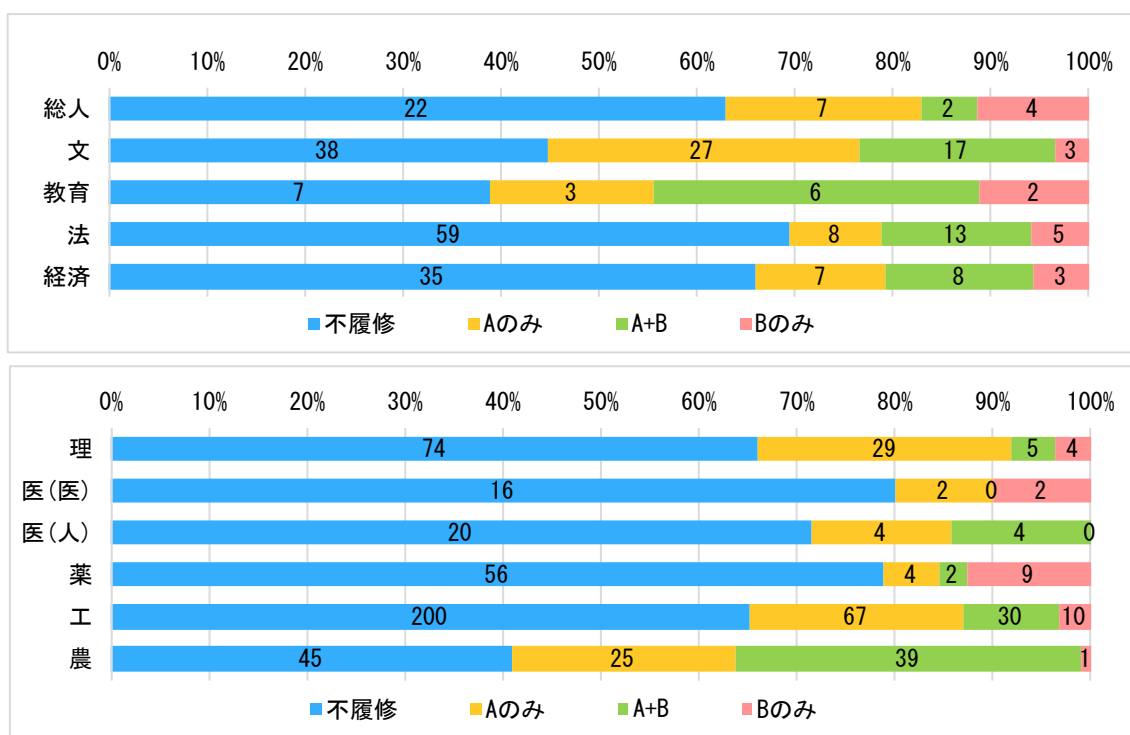
*参考：チェックなし 309名

Q.21では、いわゆる1単位科目の履修状況を尋ねた。スポーツ実習と理系の実験科目が該当する。それぞれの科目の意義は明確に設定されているが、その意義とは無関係に、学習時間やコマ数の割に単位が少ないという理由で、履修を敬遠するという傾向にある。その実態を調べることが本設問の目的である。

<図18 スポーツ実習履修状況>



<図19 スポーツ実習履修率（上：文系学部、下：理系学部）>



上図のように、学部により履修動向に大きな差がある。医医、医人、薬学では70～80%の学生が不履修であるが、一方、教育、農学では40%に留まる。各学部のクラス指定の有無やカリキュラムによりこのような差が現れる。全体平均として60%を超える学生がスポーツ実習を履修していない、またQ.34で後述するように30～40%の学生は1週間を通してほとんど運動をしていないという事実は、多くの学生が18～19才の若者として健康的とは言えない学生生活を送っていることを示している。

次に、理系の実験科目について結果を述べる。まず参考資料は、2017年度の実験科目履修者数であり、実験科目全体の実施規模を概観できる。

◆参考資料（履修取り消し後の数値、院生・非正規生を含む）

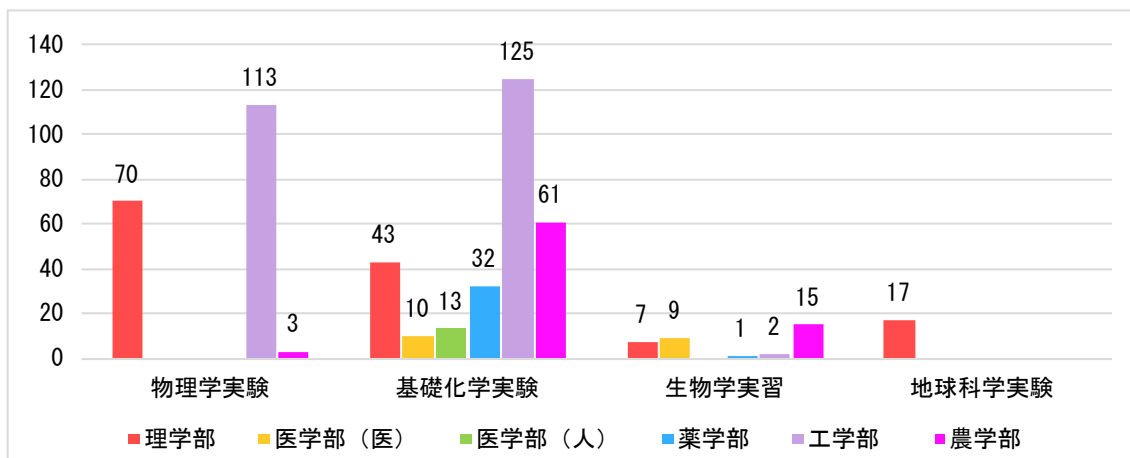
履修者数	2017(前)	2017(後)	全体
物理学実験	279	248	527
基礎化学実験	398	326	724
生物学実習I	63	46	109
生物学実習II	14	5	19
生物学実習III	29	19	48
地球科学実験	38	29	67

この中で、生物学実習のみ履修者が増加する傾向にあるが、医学部での選択必修化や農学部でのガイダンスの効果が表れているものと考えられる。他の実験科目では、漸減傾向が続いており、先に述べたコストパフォーマンスが悪いという学生意識が履修者減少を招いているものと思われる。

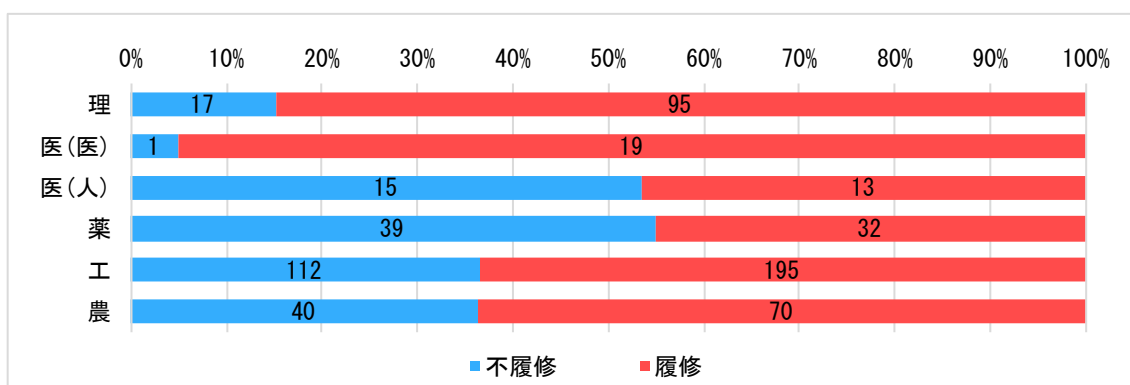
下図は、実験科目を履修した理系学生の回答数を学部別、実験別に示したものである。一目して分かる

ように、物理学実験は理と工の学生が履修し、基礎化学実験は全ての学部から履修しているが主に工、農、理、薬から、生物学実習は農、医、理から、地球科学実験は理の学生が履修するという結果である。

<図 2 0 理系学部別実験履修者数>



<図 2 1 理系学部別実験科目不履修率>



次の図は、1科目も実験を履修していない学生の割合を図示している。理系学部といいながら、医人と薬学で約半数の学生が実験を履修しない、また工学、農学のように必修または選択必修であっても不思議でない実験科目を30%以上の学生が履修していないのは驚きである。もし単位効率でこのような傾向が助長されているとするならば、嘆かわしい結果である。なお、文系学生の実験科目履修はごく僅かであったことから、上記の考察より除外した。

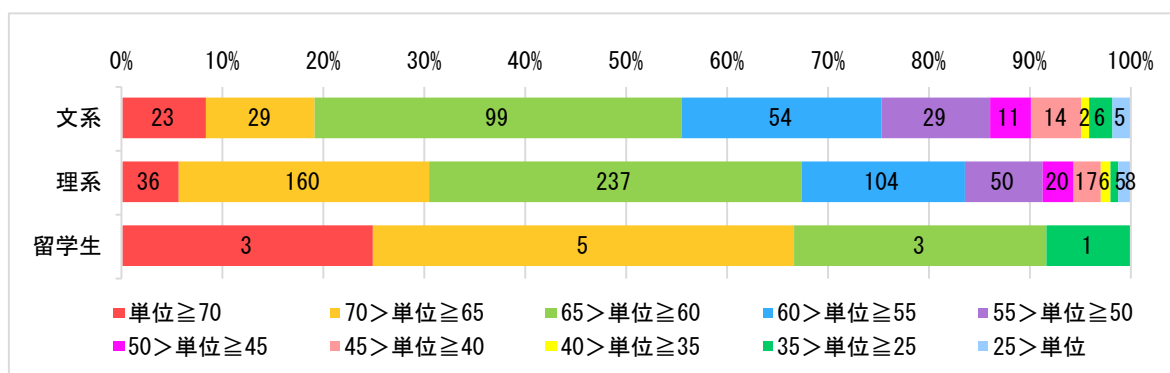
7. 履修動向と成績（単位、GPA、TOEFL ITP）

Q.22 あなたは1回生の間に何単位を取得しましたか。全学共通科目に加えて、専門基礎科目、専門科目を含む合計を、1回生終了時に受けとった成績表で確認してお答えください。

- ①単位 \geq 70 ②70>単位 \geq 65 ③65>単位 \geq 60 ④60>単位 \geq 55 ⑤55>単位 \geq 50 ⑥50>単位 \geq 45
 ⑦45>単位 \geq 40 ⑧40>単位 \geq 35 ⑨35>単位 \geq 25 ⑩25>単位

※⑨のみ10単位区切り、他5単位区切り

<図2.2 取得単位>



単位の実質化の議論において、授業時間ならびに予習・復習・課題等に要する授業外学習時間を十分に確保することが重要である。大学設置基準では2単位授業1コマにつき4時間の授業外学習時間が求められており、そのためには1日に学習する授業コマ数は適切に抑制される必要がある。本学では全学共通科目にCAP制を導入して、多くの学部が1学期34単位（総人は20コマ）を上限としている。これに加えて学部により専門基礎科目の履修が課せられている。この設問では1回生の年間取得単位数を調査した。今年は調査単位数を「単位 \geq 70」まで拡げたため、昨年より明確に実態を把握できた。文系学部では60単位以上を取得した学生が56%、理系学部では67%（65単位以上取得の学生比率では、文系学生の20%、理系学生の30%）もあり、1回生で過剰な単位を取得することが常態化していると言える。本学の多くの学部で卒業要件となっている138~156単位（大学設置基準では124単位）と比較すると、要卒単位の約半分を1年間で取得するという事態であり、本学の1回生は明らかに単位の取り過ぎ状態にある。これは単位の実質化の要請からも、また標準修業年数4年という教育体系から見ても異常な状態であり、早急に改善するための対策を取る必要がある。

各学部で学生の履修行動に基づいて、1回生に配当する教養・共通科目や専門基礎科目の種類や単位数等、1回生のカリキュラム全般についてより詳細な検討が期待される。

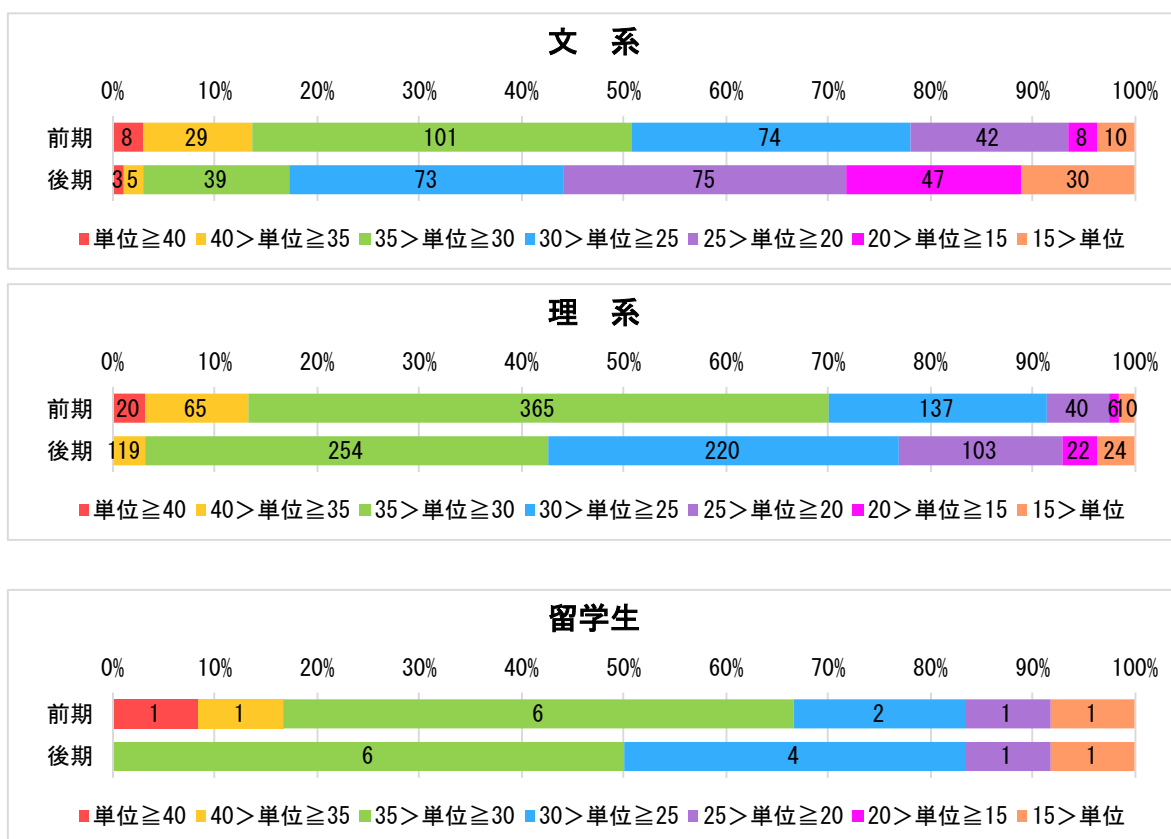
Q.23 Q.22 について、その取得単位数のうち、全学共通科目について「前期」の取得単位数はどれくらいですか。

- ①単位 \geq 40 ②40>単位 \geq 35 ③35>単位 \geq 30 ④30>単位 \geq 25 ⑤25>単位 \geq 20 ⑥20>単位 \geq 15
⑦15>単位

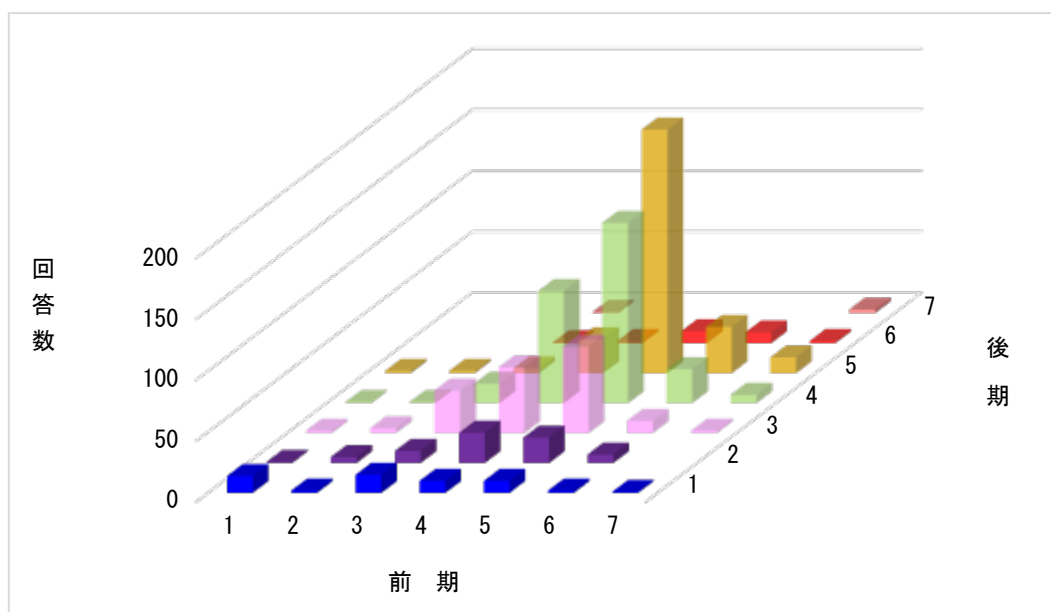
Q.24 Q.22 について、その取得単位数のうち、全学共通科目について「後期」の取得単位数はどれくらいですか。

- ①単位 \geq 40 ②40>単位 \geq 35 ③35>単位 \geq 30 ④30>単位 \geq 25 ⑤25>単位 \geq 20 ⑥20>単位 \geq 15
⑦15>単位

<図 2 3 全学共通科目の取得単位>



<図 2 4 全学共通科目の取得単位・前後期の相関>



※グラフの数値は以下のとおりとする。

「単位 ≥ 40 」を7、「 $40 > \text{単位} \geq 35$ 」を6、「 $35 > \text{単位} \geq 30$ 」を5、「 $30 > \text{単位} \geq 25$ 」を4、「 $25 > \text{単位} \geq 20$ 」を3、「 $20 > \text{単位} \geq 15$ 」を2、「 $15 > \text{単位}$ 」を1

Q.22 に続いて、取得単位の中の全学共通科目の単位数を前期、後期に分けて調査した。Q.22 と同様、昨年の調査では単位数区分が不十分であったため、Q.23, 24 でも「単位 ≥ 40 」まで拡大した。

図 23 で文系、理系で比較すると理系の方が取得単位数の多い学生比率が高い。前期では、「 $35 > \text{単位} \geq 30$ 」の区分つまり CAP ぎりぎりまで取得している学生が過半数であり、全体としてどの学部でも前期と比べて後期の履修は少なくなる。

図 24 では、前期・後期の単位取得数の相関を見ている。上述のように「 $35 > \text{単位} \geq 30$ 」の区分 5 は、CAP 上限の区分であるが、意外なことに、それより多い区分 6、7 にも相当数の学生がいる。これは時間割に現れない集中講義を履修して単位を取得した学生と思われる。図 24 でピークになる「前期 5、後期 5」の枠に着目すると、手前側（後期で 4、3、2 と少ない単位数側）に尾を引く分布になることから、前期に多くの単位を取得した学生は、後期において抑制気味に履修する傾向が見て取れる。相対的に学生数の多い理学、工学で、前期、後期とも 30 単位以上取る学生が半数近くいることから「前期 5、後期 5」の枠がピークになる。前期区分 4 グループの後期履修をみても、「前期 4、後期 4」が最大値になっていることから、多くの学生の履修行動は前期、後期で継続性があることを示している。先に述べたように、これらの早期過剰取得については、各学部の 1 回生カリキュラム、履修指導、CAP 制度の適正化により是正していく必要があるように思われる。

Q.25 1回生の間に単位を取得した「人文・社会科学科目群」の科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。

- ①ほぼ100% ②約80% ③約60% ④50%以下

Q.26 1回生の間に単位を取得した「自然科学科目群」の科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。

- ①ほぼ100% ②約80% ③約60% ④50%以下

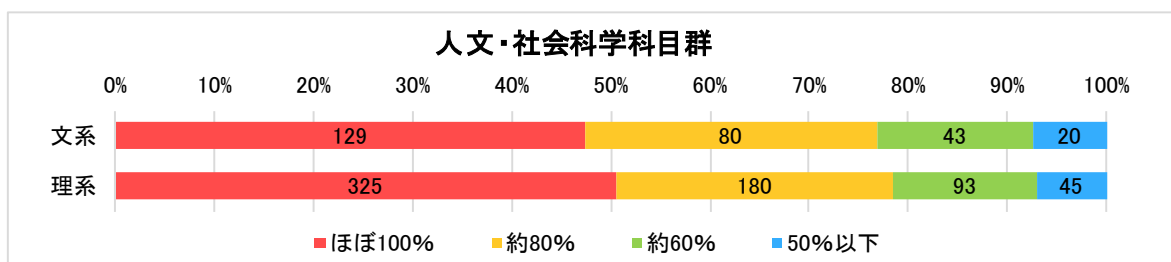
Q.27 1回生の間に単位を取得した「外国語科目群」の英語科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。

- ①ほぼ100% ②約80% ③約60% ④50%以下

Q.28 1回生の間に単位を取得した「外国語科目群」の初修外国語科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。

- ①ほぼ100% ②約80% ③約60% ④50%以下

<図25>



4科目群（「人文・社会科学科目群」「自然科学科目群」「外国語科目群・英語」「外国語科目群・初修外国語」）の授業出席率を学部別に記載した。実際に出席回数を計測したのではなく学生本人の意識による集計であることに留意されたい。図25は人文・社会科学科目群の出席率を示したものである。授業に付いていくためにはやはり「80%以上」の出席率が必要と考えるが、平均的には全体の80%程度の学生が「80%以上」の出席率と答えている。

<図26>

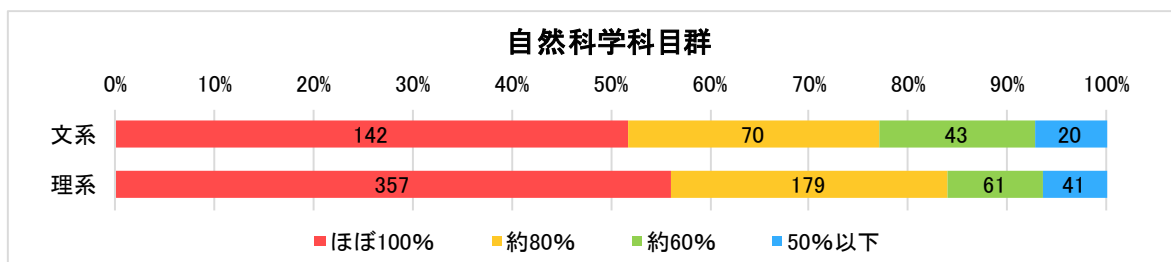
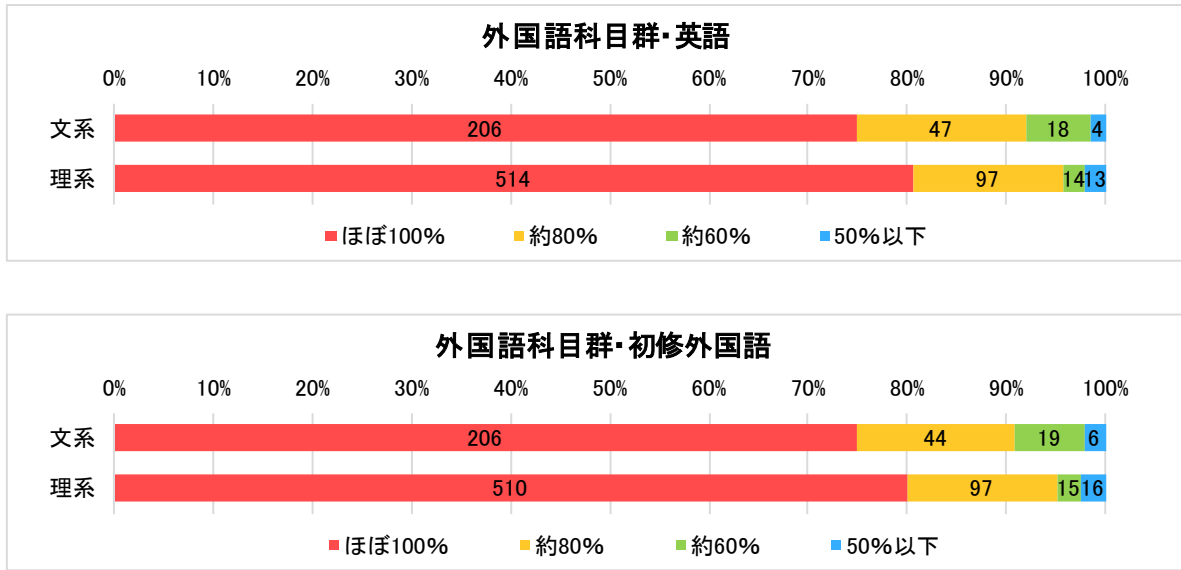


図25と同様に、「自然科学科目群」について尋ねたものがこの図である。結果は図25とほぼ同じである。

<図 2 7 上：英語、下：初修外国語>



英語科目と初修外国語科目の出席率は高く、「ほぼ 100%」と回答した学生の割合は 70%を超えており、「80%以上」では全体の 90%程度になっている。

4 科目群で比較してみると、語学科目の出席率は人文社会科目群と自然科学科目群の出席率よりも明確に高い。出席点検や授業内での応答が求められる語学と、講義形式が多い一般科目との授業形態の差を反映しているものと思われる。教養・共通教育の在り方の議論において参考になる結果である。

Q.29 あなたの 1 回生（前期＋後期）終了時の GPA はどのレベルですか。1 回生終了時に受けとったあなたの成績表で確認してお答えください（非公開）。

- ①GPA \geq 4.0 ②4.0 > GPA \geq 3.5 ③3.5 > GPA \geq 3.0 ④3.0 > GPA \geq 2.5 ⑤2.5 > GPA \geq 2.0
 ⑥2.0 > GPA \geq 1.5 ⑦1.5 > GPA

Q.30 あなたが 1 回生後期（2017 年 12 月）に受けた TOEFL ITP のスコアはどのレベルでしたか。

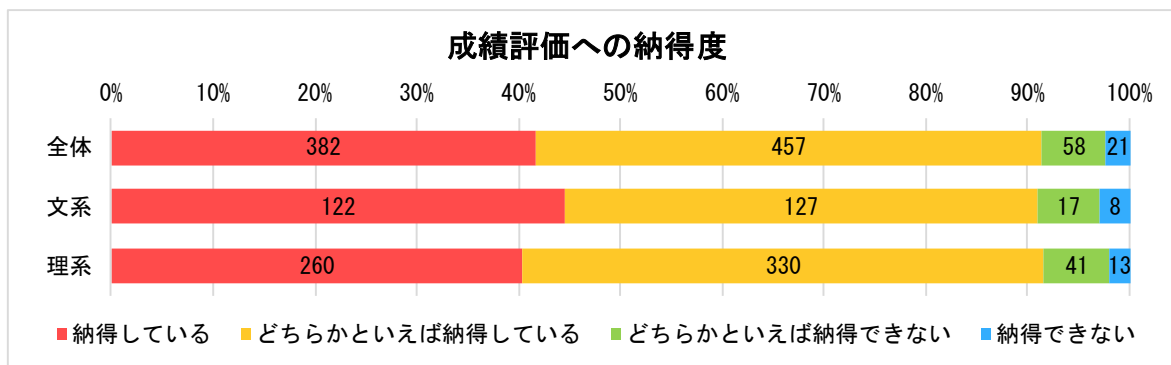
- ①スコア \geq 550 ②547 \geq スコア \geq 503 ③500 \geq スコア \geq 450 ④447 \geq スコア（非公開）

8. 成績評価への納得度

Q.31 1回生時の全学共通科目の成績評価についてお尋ねします：全体として自分の成績評価に納得していますか。

- ①納得している ②どちらかといえば納得している ③どちらかといえば納得できない
④納得できない

<図 28 >



成績評価の納得度については、これまでのアンケートでも同じ質問をして継続的に調査している。「納得している」、「どちらかといえば納得している」を合わせると、肯定的な回答をした学生はほぼ90%になっており、納得度は高いと言える。

<表 3 >

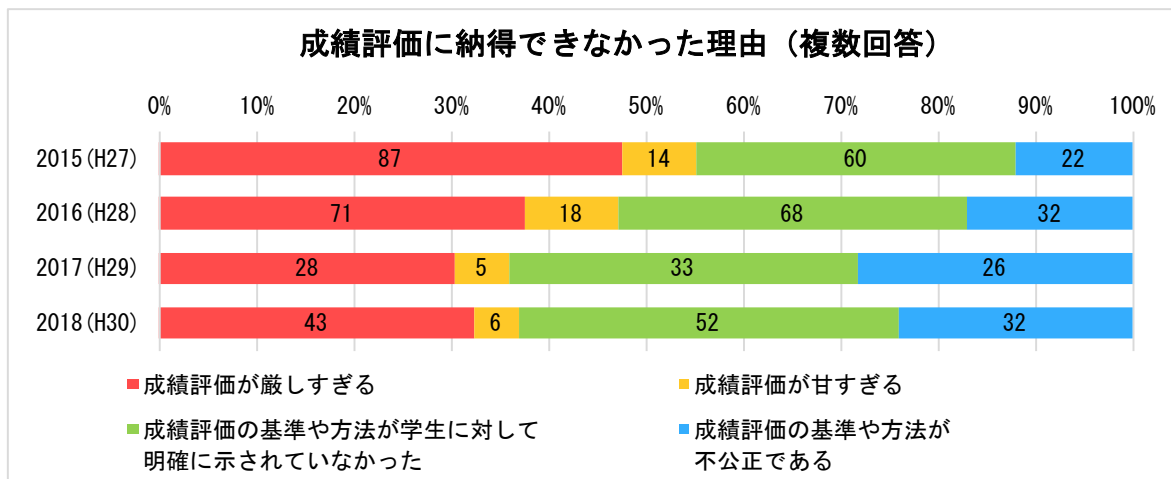
	2005	2016	2017	2018
納得している	39%	46%	41%	42%
どちらかといえば納得している	46%	43%	48%	50%
どちらかといえば納得できない	10%	8%	8%	6%
納得できない	5%	3%	3%	2%

この統計を取り始めた初期の頃、2005（平成17）年、昨年との比較をするために、回答における各項目の百分率を表に示した。上述したように「納得している」、「どちらかといえば納得している」を合わせると、最近では毎年90%程度を維持している。

Q.32 Q.31で「どちらかといえば納得できない」又は「納得できない」を選んだ方へ：成績評価に納得できなかった理由は何ですか。次の中からあてはまる全てのものにチェックをつけてください。

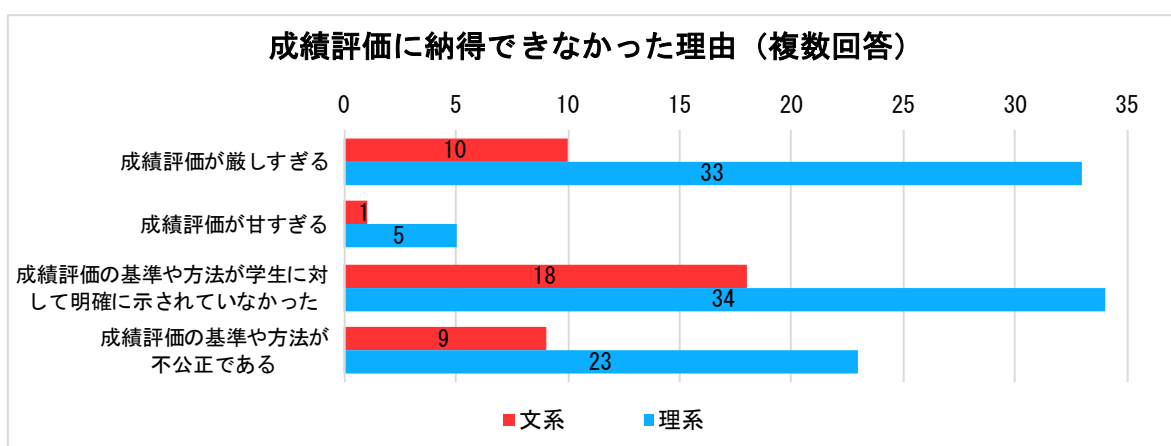
- ①成績評価が厳しすぎる ②成績評価が甘すぎる ③成績評価の基準や方法が学生に対して明確に示されていない
 ④成績評価の基準や方法が不公正である ⑤その他（記述回答）

<図29>



Q.32では成績評価に納得できない理由を尋ねた。この質問は毎年継続して質問している項目である。複数回答を可能にしているため、全回答における①～④の比率を図示している。3年前の2015年度からのデータと合わせて変化を見ると、①の「厳しすぎる」の割合は次第に減る一方、④の「不公正」と感じる学生の割合が増加している。推測であるが、GPAの導入で成績に対する関心が高まり、相対評価としての明確さ、公平さを求める意見が強くなっているのではないだろうか。ただし、回答全体の90%の学生は納得している」と答えており、この項については回答者のうち約10%の意見であることに留意して判断する必要がある。

<図30>



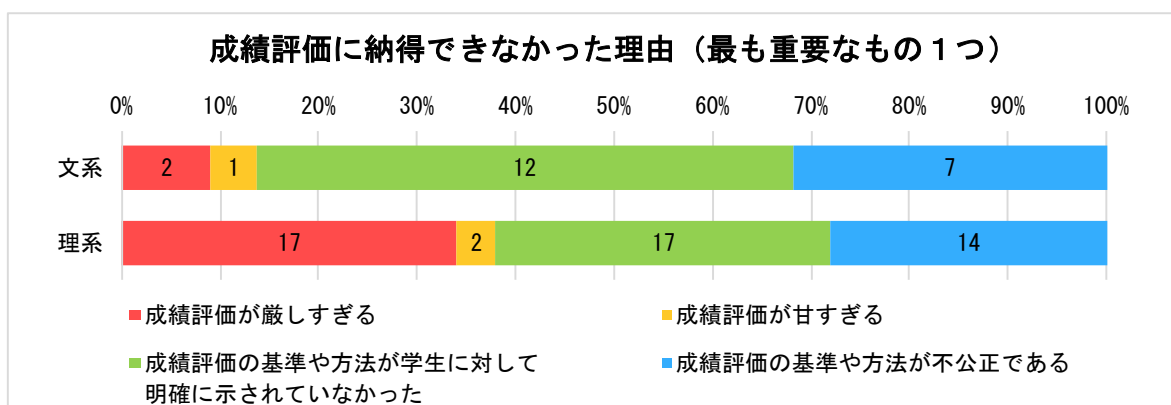
この図では文系と理系で回答度数を単純に表示している。昨年度の調査では、文系学生は①の「成績評価が厳しすぎる」が最も多く、次いで③「基準や方法が不明確」が多かった。しかし、今年は文系、理系

とも、③「基準や方法が不明確」が最も多く、次いで①の「成績評価が厳しすぎる」と④「基準や方法が不公正」が多くなる。上述したように相対評価に対する関心が理系の学生の方により強く表れている。コース分けや配属などで成績評価が用いられることが理系では多いためと推測される。

Q.33 Q.32 で選んだもののうち、最も重要なもの1つを選択してください。

- ①成績評価が厳しすぎる ②成績評価が甘すぎる ③成績評価の基準や方法が学生に対して明確に示されていない
 ④成績評価の基準や方法が不公正である ⑤その他

<図31>



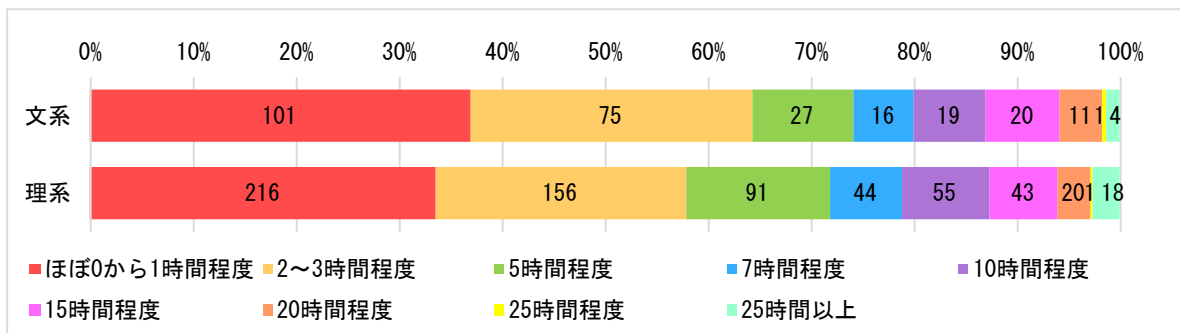
納得できない理由の最重要項目として選ばれた項目がこの図である。先の複数回答と同じく、単一回答においても③「基準や方法が不明確」が最も多く、理系では①の「成績評価が厳しすぎる」が同数で多く、一方、文系では④「基準や方法が不公正」が多くなった。

9. 学生生活

Q.34 平均して1週間に何時間程度、運動（スポーツ、散歩、ジョギング、サイクリング等）をしていますか。

- ①ほぼ0から1時間程度 ②2～3時間程度 ③5時間程度 ④7時間程度 ⑤10時間程度
⑥15時間程度 ⑦20時間程度 ⑧25時間程度 ⑨25時間以上

<図32>

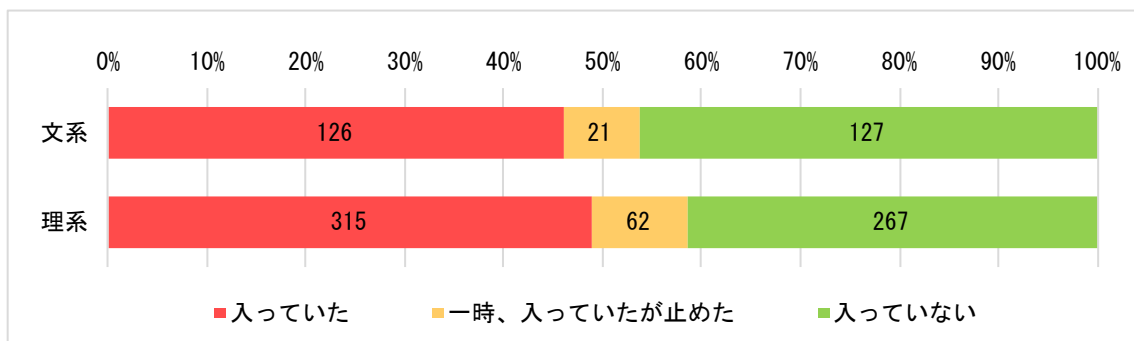


この質問では、1週間に運動する時間を尋ねた。結果を図32に示したが、文系、理系を問わず30～40%の学生は0～1時間/週程度とほとんど運動をしていない。Q.21で正課のスポーツ実習を履修していない学生が60%を超えていること、さらに彼らが18～19才という年齢を考えるとあまりに運動量が少ないことに驚く結果である。約20%の学生は週2～3時間、つまり一日に20分程度の運動をしている。週7時間以上の学生はおそらく体育系のサークルやクラブに入っている学生と思われるが、その比率は20～30%である。次のQ.35で、運動系のクラブやサークルに入っていると答えた学生が40～50%であることを考慮すると、その約半分が軽度の運動サークルであると推測される。

Q.35 あなたは、1回生のときに運動系のクラブやサークルに入っていましたか。

- ①入っていた ②一時、入っていたが止めた ③入っていない

<図33>

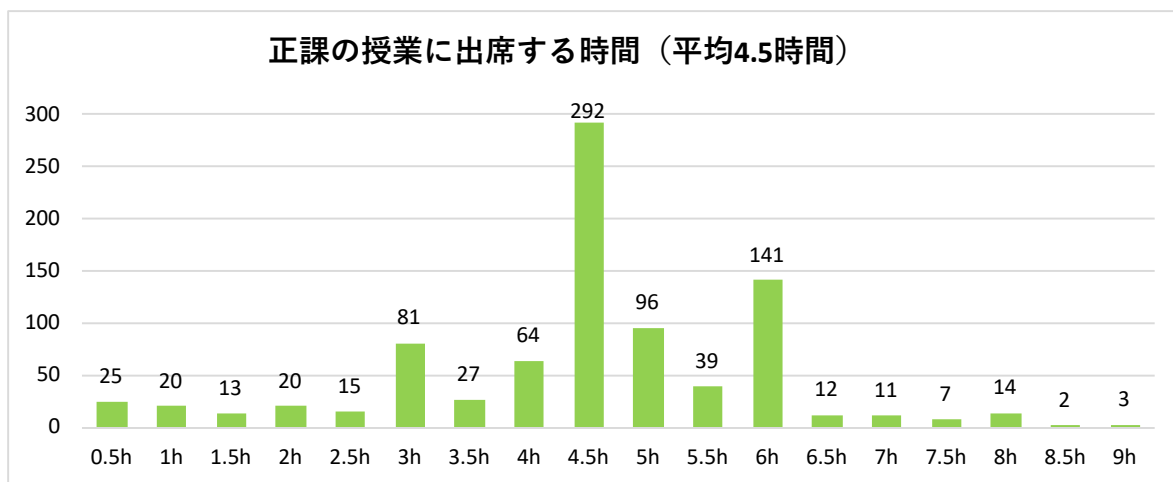


Q.36 授業期間中のあなたの平均的な一日（休祝日を除く月曜日～金曜日）における、Q.36～Q.41の活動時間を教えてください。なお、活動時間の項目は、＜正課の授業出席時間＞＜通学時間＞＜クラブ・サークル等の課外活動時間＞＜アルバイトの時間＞＜授業の予習・復習・レポート作成等の時間＞＜授業とは直接関係のない学習や読書の時間＞です。

＜正課の授業に出席する時間＞

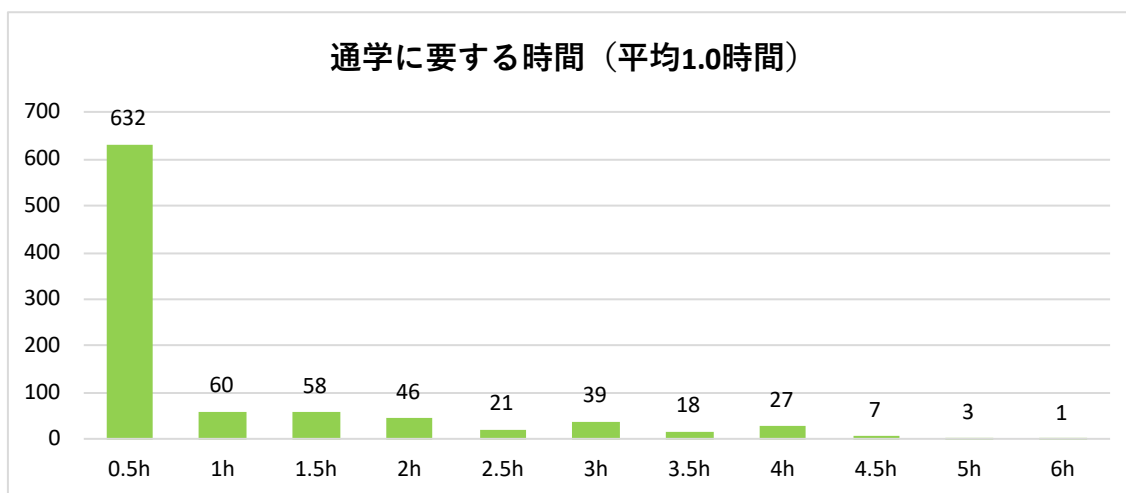
※Q41までのグラフ：「0」は「0.5h」を含む

＜図34＞



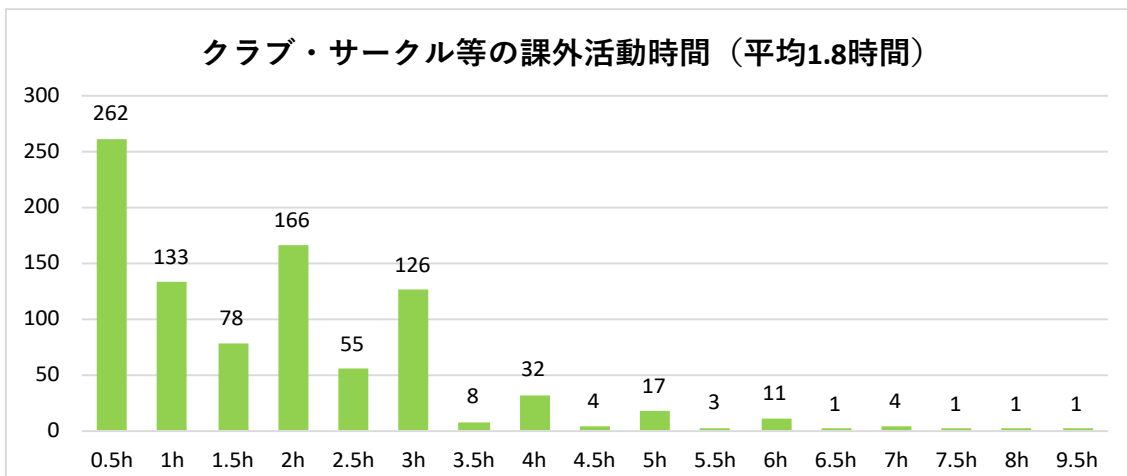
Q.37 ＜通学に要する時間＞

＜図35＞



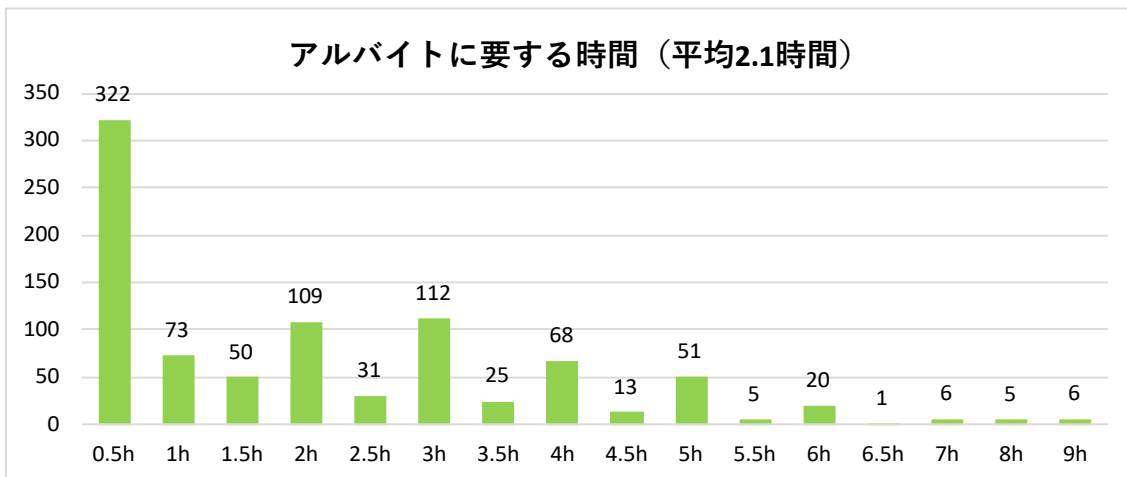
Q.38 <クラブ・サークル等の課外活動時間>

<図36>



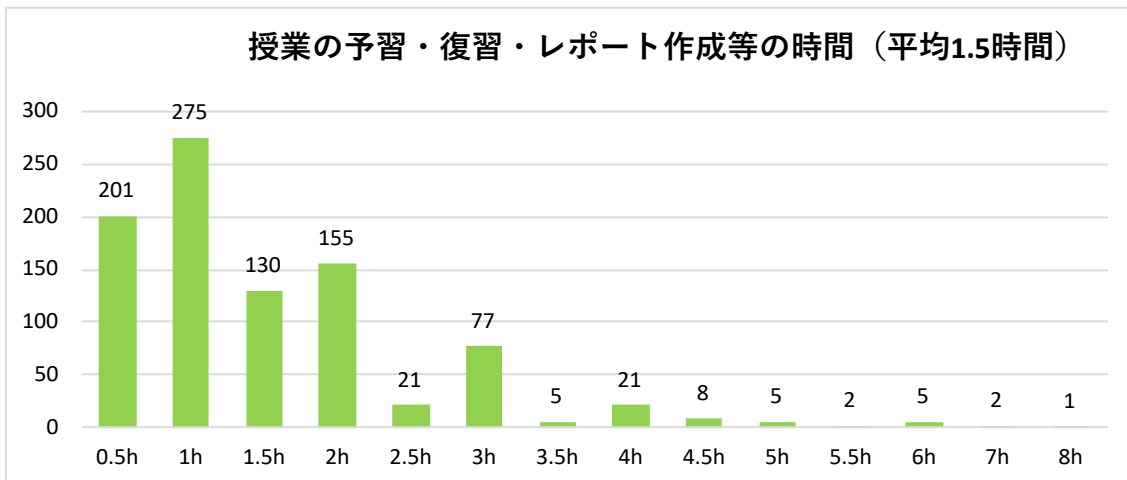
Q.39 <アルバイトに要する時間>

<図37>



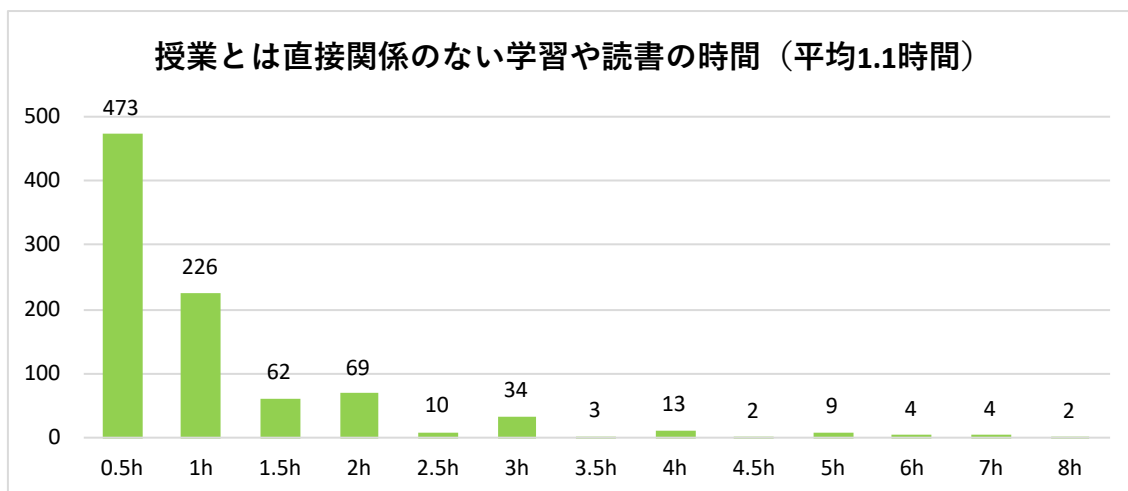
Q.40 <授業の予習・復習・レポート作成等の時間>

<図38>



Q.41 <授業とは直接関係のない学習や読書の時間>

<図39>



1回生がどのように生活時間を配分しているか、学生生活の実態と学習行動との関連を Q.36~Q.41 の6項目の質問により調べた。

各項目について人数分布を図34~39に記載している。また、表4に全体、文系、理系での各項目平均値を示した。なお、平均値の算出には、10h以上とした回答を、データの信頼性を保つため除いた。

昨年度の調査では1週間当たりの活動時間を尋ね、時間数の記入を求めたところ、不合理な数字が多数入力されたため、信頼性の観点から多くのデータを削除することになった。そこで今年度は一定刻みの指定数字を並べたプルダウン方式により回答を求めた。また、質問は学期中の平均的な日(休祝日を除く月曜日~金曜日)での時間配分を尋ねることに変更した。したがって、休日に多いであろう「アルバイト」、「授業とは直接関係のない学習や読書の時間」等については解釈に注意が必要である。

<表4 1回生の学生生活時間/日>

H30	正課	通学	予習・復習等	クラブ	バイト	*
全体	4.5	1.0	1.5	1.8	2.1	1.1
文系	4.3	1.0	1.5	1.9	2.3	1.3
理系	4.5	1.0	1.5	1.8	2.0	1.0

* 授業とは直接関係のない学習や読書の時間

全体の平均値で見ると、

- ・正課授業出席時間の1日4.5時間は、1コマ授業を1.5時間として1日3.0コマに相当している。1コマを2単位科目として換算すると年60単位となり、Q.22で過半数の学生が60単位以上取得していたことと整合している。文系と理系で比較すると、僅かながら有意の差があり、理系のカリキュラムの方がやや密になっていることを示している。
- ・通学時間については、往復約1時間の通学時間である。昨年度に見られた文系の学生の方が理系学生より通学時間が少ないという傾向は、僅かであった。回答の仕方を週から日にしたこと、またプルダウンで選択する時間の刻みが粗かったことが影響しているものと推測される。

- ・単位の実質化の議論でも着目され、かつ成績に影響するであろう授業時間外学習時間（授業の予習・復習・レポート作成等の時間）の項目では、文系、理系とも1.5時間となり、残念ながら昨年度（2.1時間）より大きく減少した。回答の仕方を週から平均的な1日にしたことにより、土日の予習・復習時間が除外された影響かも知れない。この点は来年度の調査で改善する予定である。大学設置基準は授業時間外学習時間として2単位授業1コマ当たり4時間の時間外学習を規定している。前述の1日3.0コマ授業が現実とすると、12時間（設置基準）が要求されることとなり、1.5時間（現実）とはあまりにも大きな隔りがある。設置基準が非現実的であるということは容易いが、それにしても時間外学習時間が1コマ授業当たり0.5時間（1.5時間/3.0コマ）という現実の値は大学の授業のあり方を再検討する必要を示している。

その他の項目についてみると、

- ・クラブ・サークルの1.8時間が時間外学習時間よりも多い。しかし分布図を見ると、ゼロを含む1時間程度の学生と2時間以上の学生に2分化しており、平均値にあまり意味はないと考えられる。この「クラブ・サークル等活動時間」と次の「アルバイト時間」では、プルダウン選択においてゼロを0.5hに含めたため、平均値が大きくなる方向に誤差が生じたと思われる。来年度に改良した上で、経年変化を見ていきたい。
- ・同じことはアルバイトについても言える。図37の分布図から分かるように、アルバイトをしていない実質ゼロ時間の学生が多数いる一方、アルバイトをしている学生群は1日当たり2~3時間程度にピークをもつ分布になる。しかし、全体平均値は2.3時間と長くなっている。この原因は、5時間と回答した学生が51名、5時間以上では112名もいるためである。全回答者数が924名の12%にもなる。このような学生生活では勉学との両立は難しいと思われる。今後とも、長時間のクラブ・サークルやアルバイト生活を送る学生の学習状況や学生全体に占める割合の変化等を注視していく必要がある。
- ・授業とは直接関係のない学習や読書の時間では、文系学生が1.3時間、理系が1.1時間とかなりの差がある。昨年度の調査でも同様な差があり、また別項目で尋ねた読書冊数にも文系（12冊/年）、理系（8冊/年）と差があった。推測ではあるが、理系学生には教科書、参考書以外の読書を全くしない学生が少なからずいるものと思われる。

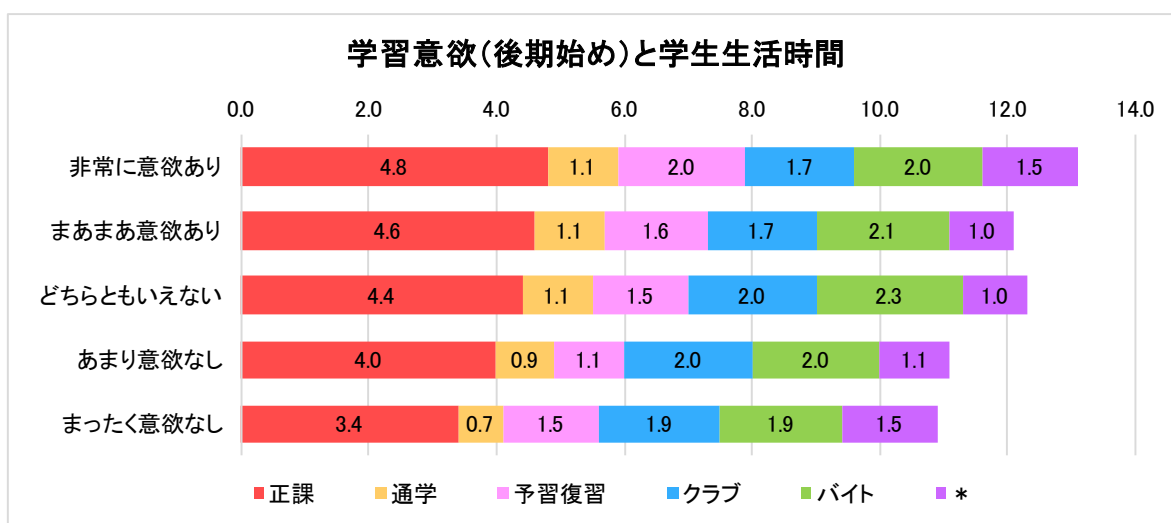
次に、Q.09「後期開始時の学習意欲」と学生生活との関連性を調べた。

<表5 Q.09 後期開始時の学習意欲と学生生活時間>

	回答数	正課	通学	予習復習	クラブ	バイト	*
非常に意欲あり	125	4.8	1.1	2.0	1.7	2.0	1.5
まあまあ意欲あり	427	4.6	1.1	1.6	1.7	2.1	1.0
どちらともいえない	200	4.4	1.1	1.5	2.0	2.3	1.0
あまり意欲なし	130	4.0	0.9	1.1	2.0	2.0	1.1
まったく意欲なし	28	3.4	0.7	1.5	1.9	1.9	1.5

* 授業とは直接関係のない学習や読書の時間

<図 40>



後期開始時の学習意欲—生活時間の図表とも、正課授業出席時間、授業時間外学習時間（予習・復習・課題等）に明確な傾向が表れている。すなわち学習意欲の高い群ほど、正課授業出席時間、時間外学習時間が長く、その和である全学習時間が伸びている。様々な要素が複雑に作用しているが、時間外学習時間を延ばすことが学習成績の向上に繋がることは明白である。

昨年度の調査では、正課授業出席時間には各群で大きな差は現れなかったが、上述のように今年度は学習意欲が「あまり意欲なし」と「全く意欲なし」の下位群では出席時間が減少する。「非常に意欲あり」から「どちらともいえない」までの中位以上の3つの群では昨年同様、正課授業出席時間に大きな差は見られない。学生の意欲に期待するのみならず、予習、復習を含めた学習行動を喚起する工夫を授業に組み入れることが、同じ正課授業時間を使いつつ学習効果を上げる有効な方法と思われ、今後の教育改善の方向性を示唆している。

正課授業出席時間と時間外学習時間を合せた適切な学習時間については議論が必要である。長ければ良いというものではない。しかし、多数派の中位群で、1回生が平日授業 4.6 時間 + 予習復習 1.6 時間 = 6.2 時間学習の大学生活を送り、かつ年 60 単位以上も取得することについて、やはり疑問を感じる。

図 40 の棒グラフの長さ（調査した活動項目の合計時間 = 約 12 時間）が下位群ほど短くなることも気がかりである。昨年度の調査で、1日の睡眠時間はどの群でも 7 時間程度と一定であったことから、調査項目になっていない余暇時間が約 5 時間 (=24-12-7) であり、余暇時間が下位群ほど長くなることを意味している。この余暇時間には、食事や休憩、友人との交際、TV、ゲーム等、さまざまな生活時間が考えられる。最近の1回生は多数の科目を履修して忙しい毎日を送っていると言われていたが、学生生活を楽しむ余裕を感じられる。

10. 学生の期待

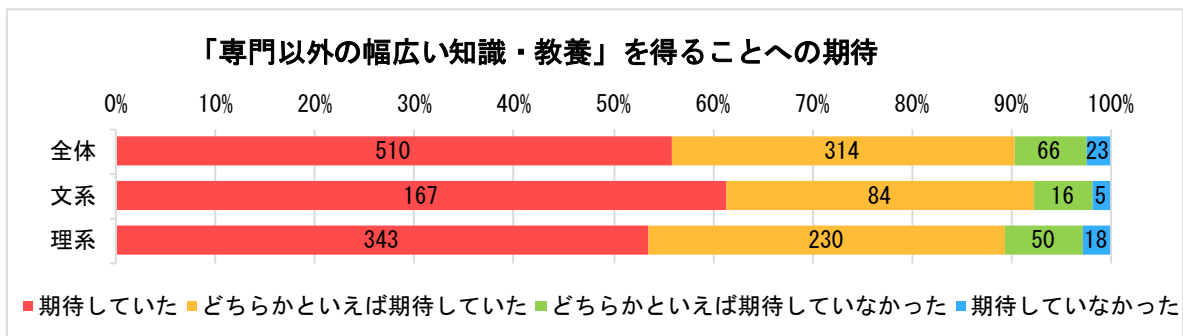
Q.42 あなたは入学当初、全学共通科目に対してどのようなことを期待していましたか。

次の各項目について教えてください：

あなたは入学当初、全学共通科目において「専門以外の幅広い知識・教養」を得ることを期待していましたか。

- ①期待していた ②どちらかといえば期待していた ③どちらかといえば期待していなかった
④期待していなかった

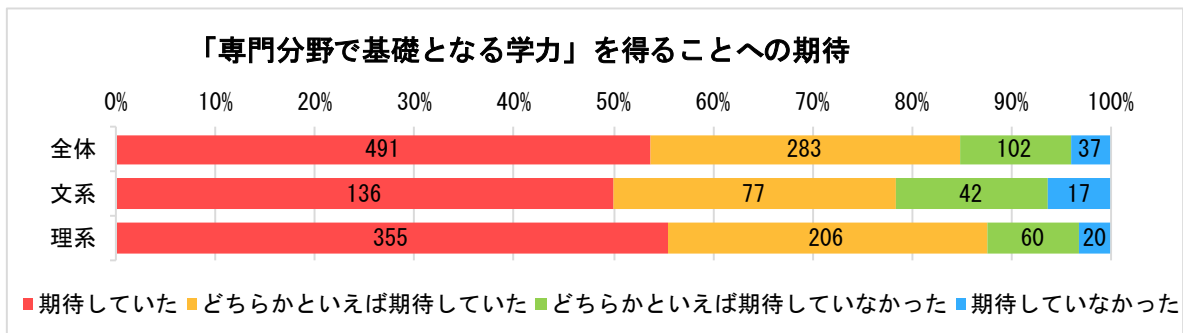
<図4 1 「専門以外の幅広い知識・教養」を得ることへの期待>



Q.43 あなたは入学当初、全学共通科目において「専門分野で基礎となる学力」を得ることを期待していましたか。

- ①期待していた ②どちらかといえば期待していた ③どちらかといえば期待していなかった
④期待していなかった

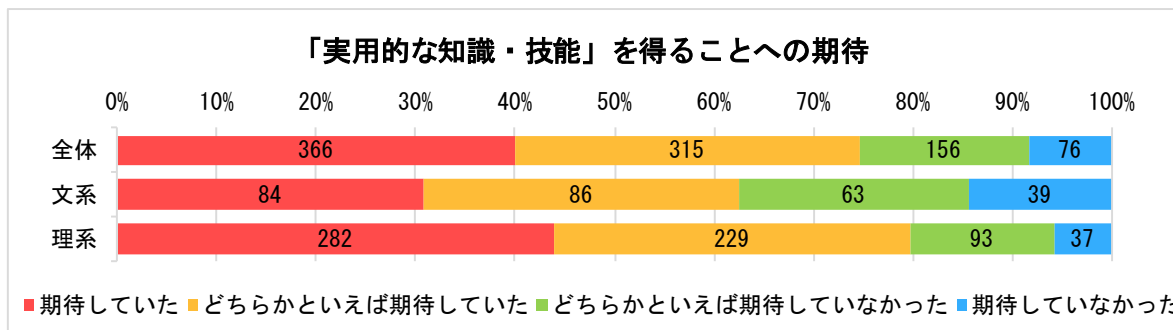
<図4 2 「専門分野で基礎となる学力」を得ることへの期待>



Q.44 あなたは入学当初、全学共通科目において「実用的な知識・技能」を得ることを期待していましたか。

- ①期待していた ②どちらかといえば期待していた ③どちらかといえば期待していなかった
④期待していなかった

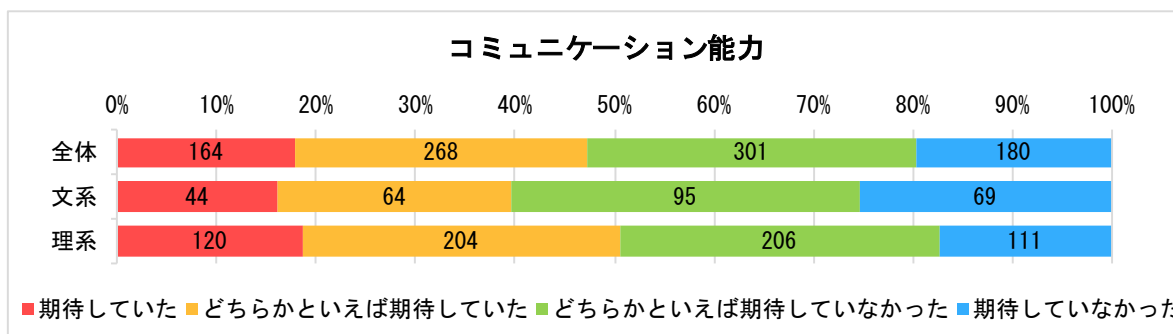
<図4 3 「実用的な知識・技能」を得ることへの期待>



Q.45 あなたは入学当初、全学共通科目において「コミュニケーション能力」を得ることを期待していましたか。

- ①期待していた ②どちらかといえば期待していた ③どちらかといえば期待していなかった
④期待していなかった

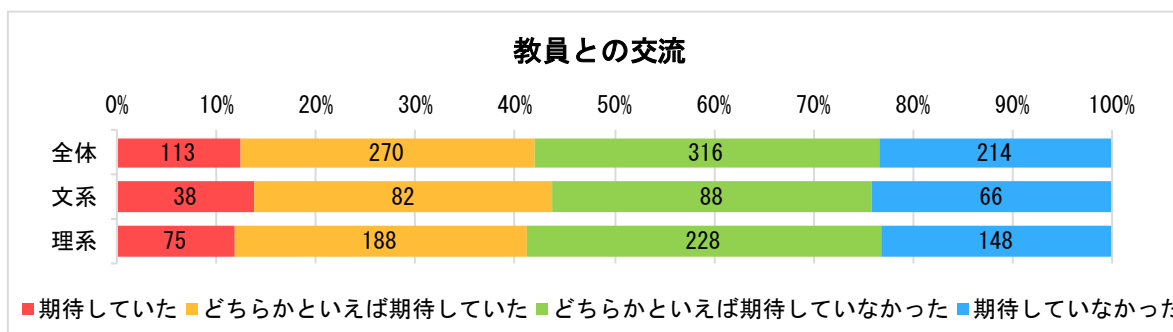
<図4 4 「コミュニケーション能力」を得ることへの期待>



Q.46 あなたは入学当初、全学共通科目において「教員との交流」を期待していましたか。

- ①期待していた ②どちらかといえば期待していた ③どちらかといえば期待していなかった
④期待していなかった

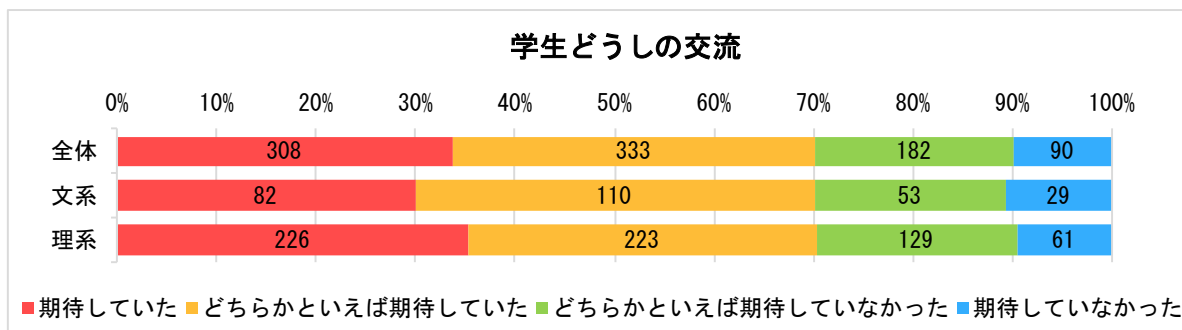
<図4 5 「教員との交流」への期待>



Q.47 あなたは入学当初、全学共通科目において「学生どうしの交流」を期待していましたか。

- ①期待していた ②どちらかといえば期待していた ③どちらかといえば期待していなかった
④期待していなかった

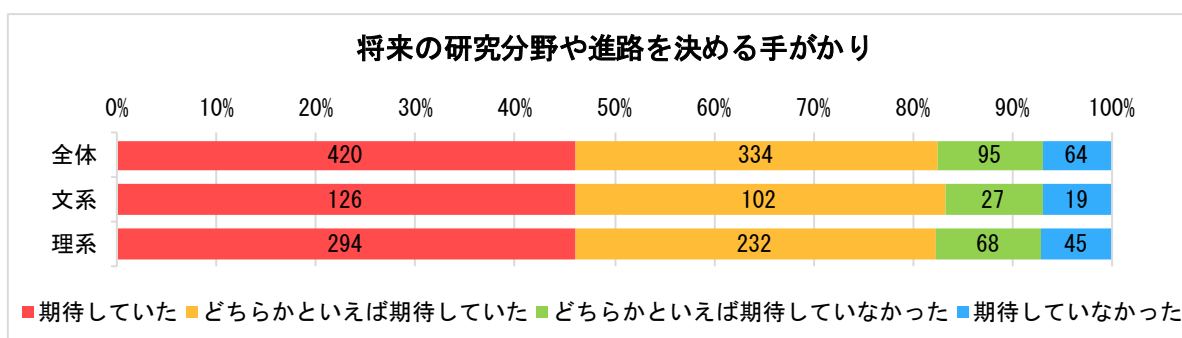
<図46 「学生どうしの交流」への期待>



Q.48 あなたは入学当初、全学共通科目において「将来の研究分野や進路を決める手がかり」を得ることを期待していましたか。

- ①期待していた ②どちらかといえば期待していた ③どちらかといえば期待していなかった
④期待していなかった

<図47 「将来の研究分野や進路を決める手がかり」を得ることへの期待>



Q.42～Q.48において、全学共通科目に関連する7項目について、入学当初の期待度を尋ねた。図の棒グラフで、「期待していた」+「どちらかといえば期待していた」の肯定的回答の割合をみると、

「専門以外の幅広い知識・教養」では約90%（昨年度87%）

「専門分野で基礎となる学力」では約85%（昨年度76%）

「将来の研究分野や進路を決める手がかり」約83%（昨年度70%）

の3項目で期待が大きく、いずれも昨年度より期待度は上昇している。

反対に、

「コミュニケーション能力」では約47%（昨年度39%）

「教員との交流」では約42%（昨年度39%）

の2項目では、昨年度よりも上昇するものの学生の期待度は今年も低いという結果になった。

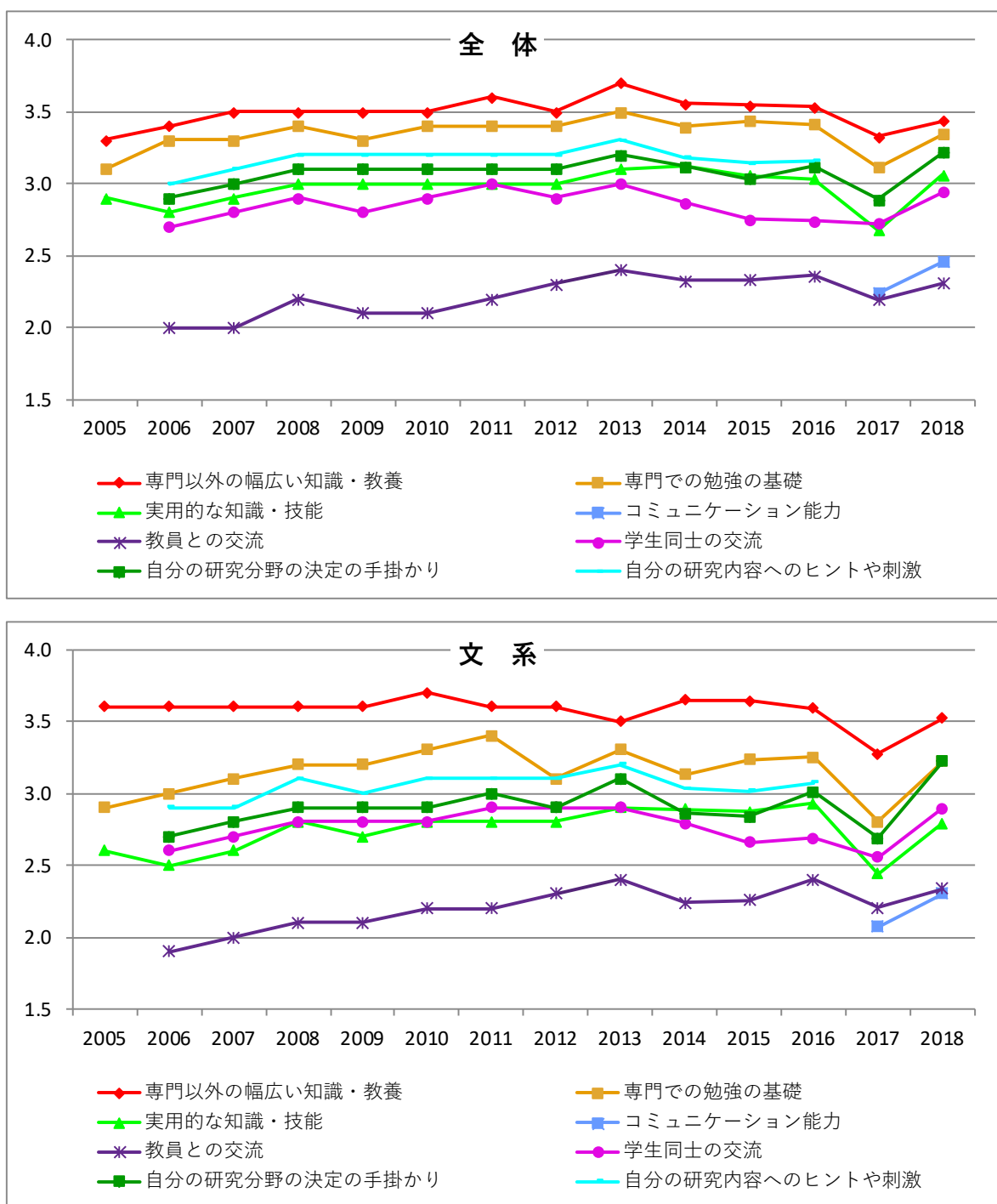
文系、理系を問わず、全ての項目で昨年より期待度は上昇しているが、特に、文系の上昇が顕著である：

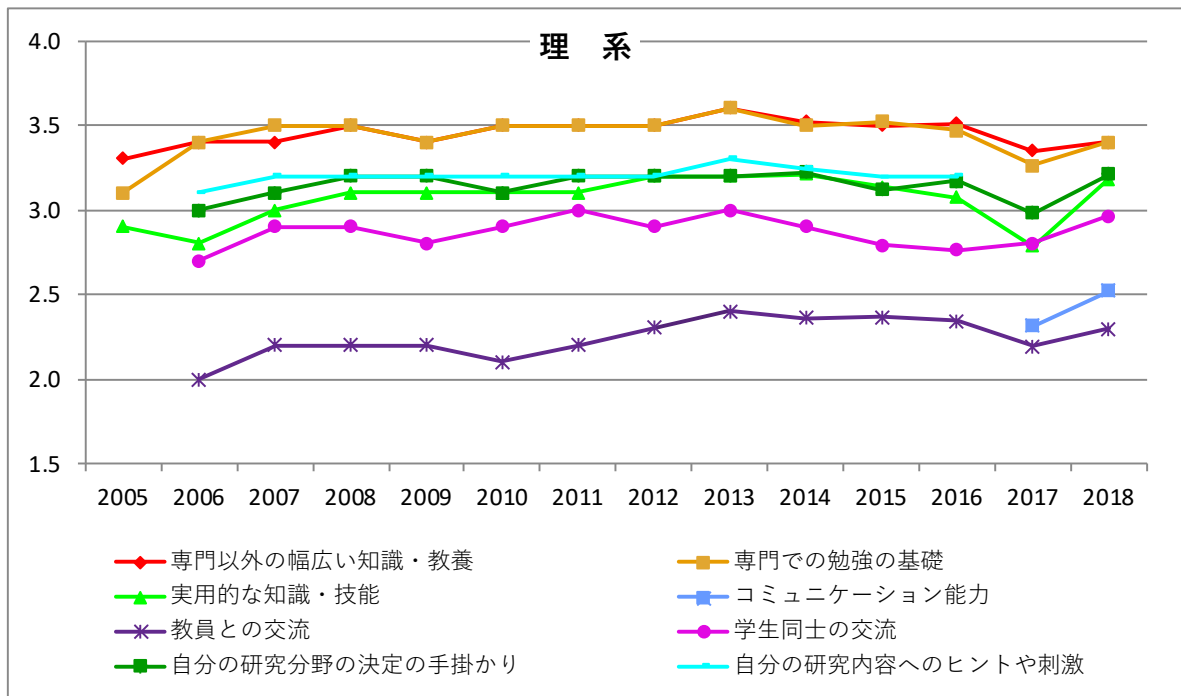
「専門分野で基礎となる学力」文系65%→78%、「専門分野で基礎となる学力」文系50%→63%、

「将来の研究分野や進路を決める手がかり」文系 61%→83%。その結果、文系、理系の差が縮まり、両系でほとんど同じ傾向になった。

◆以下のグラフは全学共通科目に関する期待度を数値化し、それぞれの年度で平均値を算出している。「期待していた」を4とし、最後の「期待していなかった」を1とした。

<図4 8 全学共通科目に関する期待度 経年変化>





※「コミュニケーション能力」は H29 年度からの新規項目 「自分の研究内容へのヒントや刺激」は H29 年度以降なし

これらの項目は、毎年2回生進級時アンケートで継続して質問している。図 48 には、全体、文系、理系の各群で 2005 年度以降の経年変化を図示している。各項目に対する期待度の傾向は例年とほぼ同じ傾向である。文系、理系とも、全学共通科目に対する期待として「専門以外の幅広い知識・教養」が一貫して最上位であることに変化はない。理系では「専門分野で基礎となる学力（専門での勉強の基礎）」が同じく高いレベルにある。一方、文系では「将来の研究分野や進路を決める手がかり」が大きく上昇していることが今年の特徴である。不思議なことに、昨年の調査では期待度がいずれの項目でも低下していたが、今年の調査では例年並みに復帰している。また期待度の項目別の値や順も再現している。Q.07（入学当初）や Q.11（現在）で学習意欲が復調していることと同じ傾向が Q.42～Q.48 の期待度の回答にも表れている。とりわけ文系の向上が著しいが、その理由については不明である。

【参考資料】2017年度卒業生進路調査アンケート結果より転載（比較のため5章にも一部掲載）
 全学共通科目の学習を振り返って、入学当初と比べて以下の項目はどの程度向上した又は得られたと思いますか。

（1）専門以外の幅広い知識・教養（比較のため5章にも掲載した）

①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

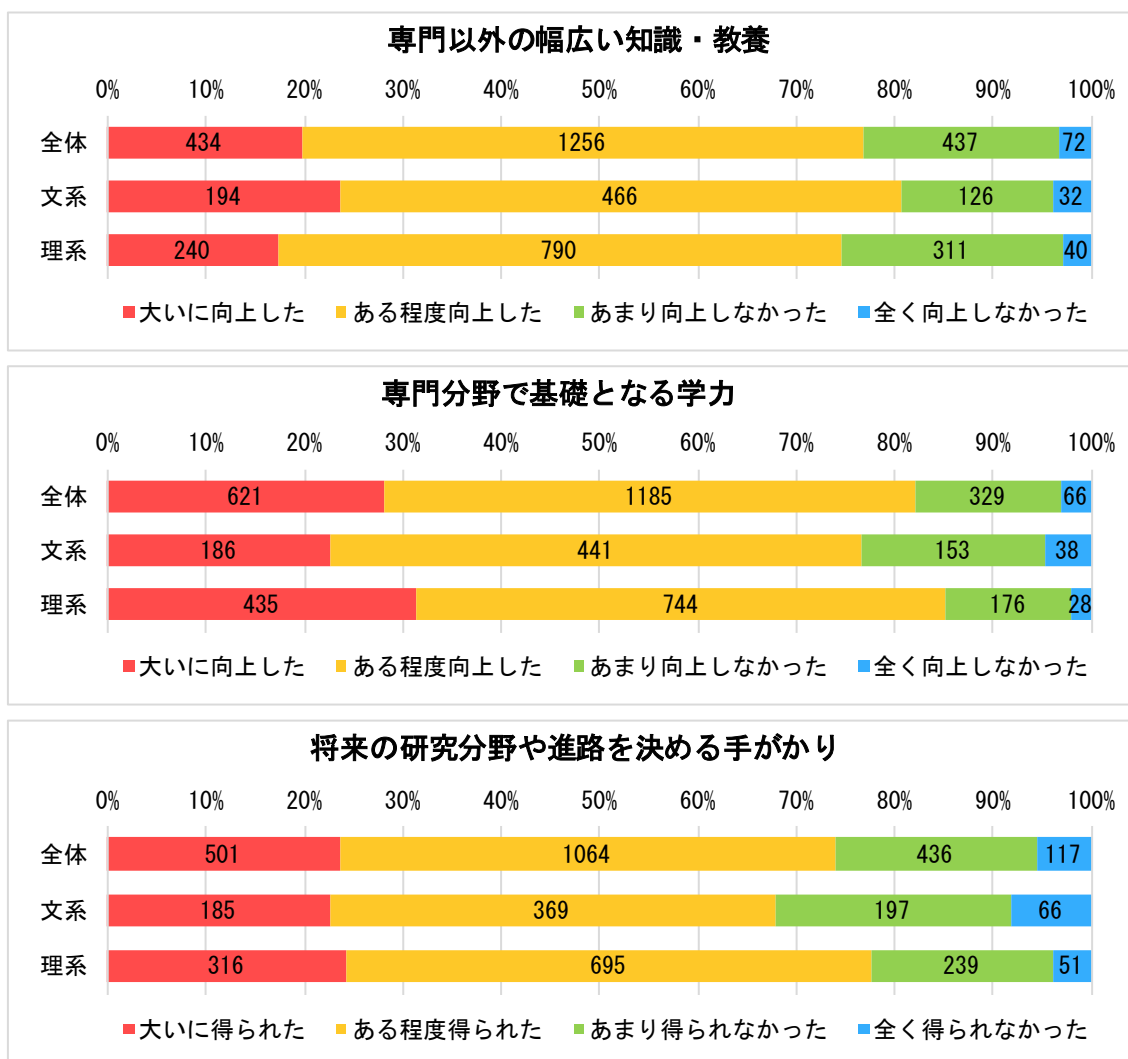
（2）専門分野で基礎となる学力

①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

（5）将来の研究分野や進路を決める手がかり

①大いに得られた ②ある程度得られた ③あまり得られなかった ④全く得られなかった

<図5-1 大学での向上感 2017年度卒業生対象>



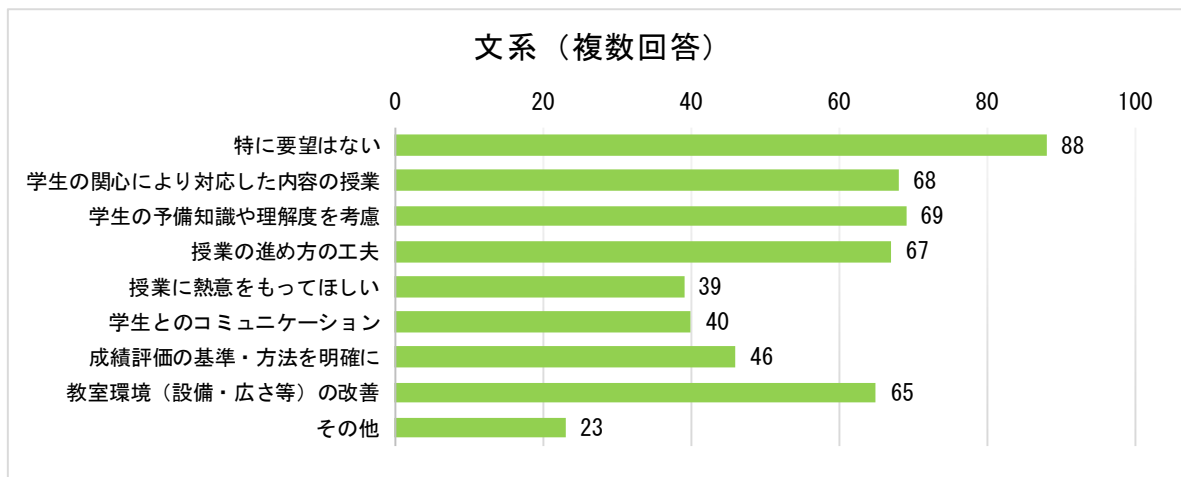
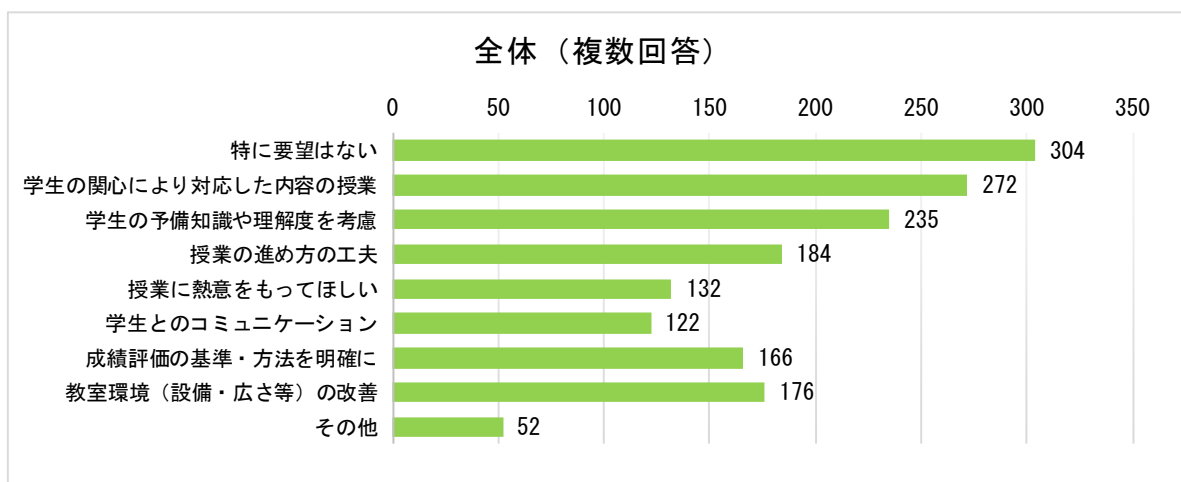
* 医（医）は設問なし

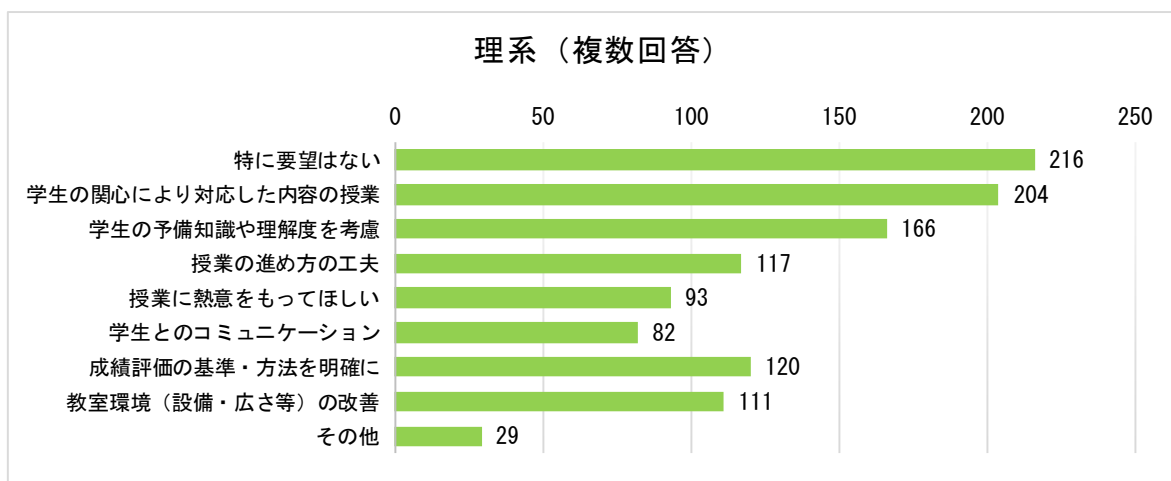
1.1. 教養・共通教育についての意見

Q.50 今後の全学共通科目に対して、どのような改善を要望しますか。あてはまるものすべてにチェックをつけてください。

- ①特に要望はない ②学生の関心により対応した内容の授業をしてほしい
 ③学生の予備知識や理解度をもっと考慮してほしい ④授業の進め方をもっと工夫してほしい
 ⑤授業にもっと熱意をもってほしい ⑥学生とのコミュニケーションをもっととってほしい
 ⑦成績評価の基準・方法をもっと明確にしてほしい ⑧教室環境(設備・広さなど)を改善してほしい
 ⑨その他(記述回答)

<図5.2>

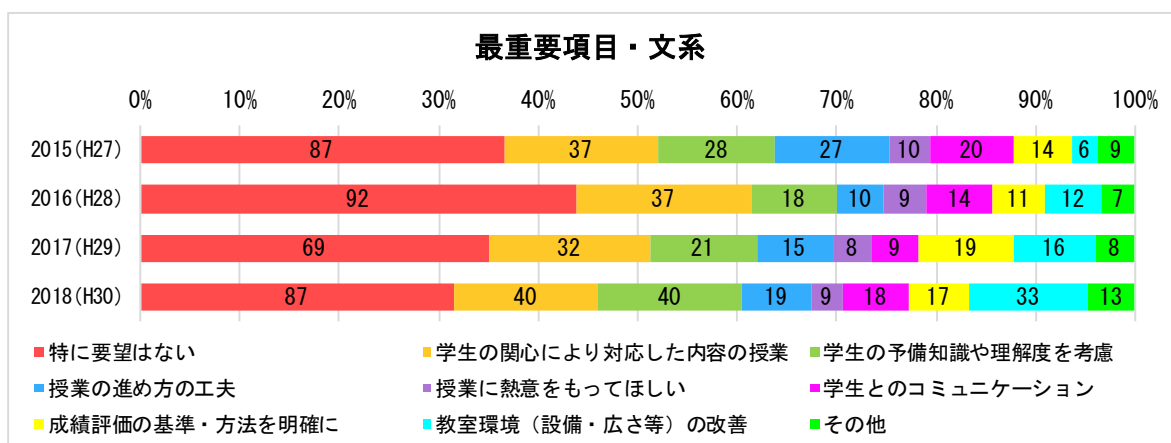
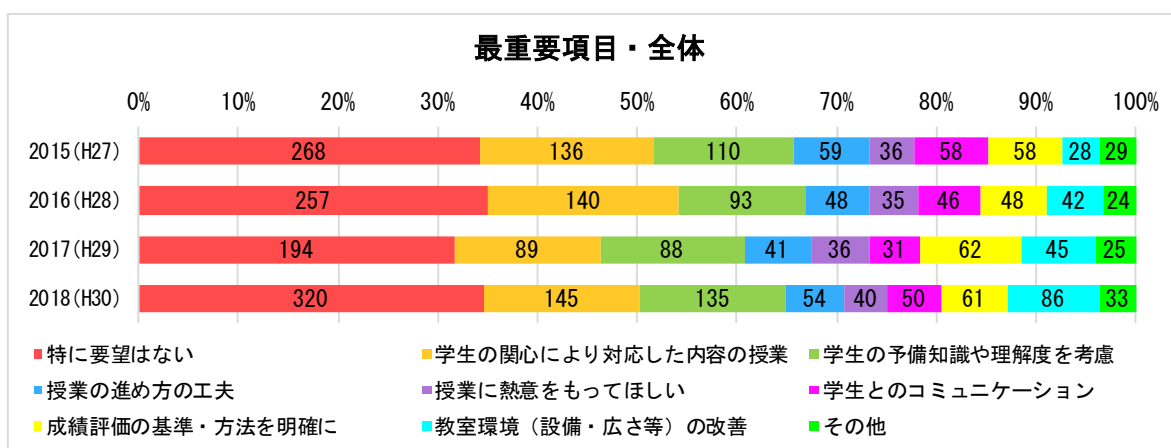


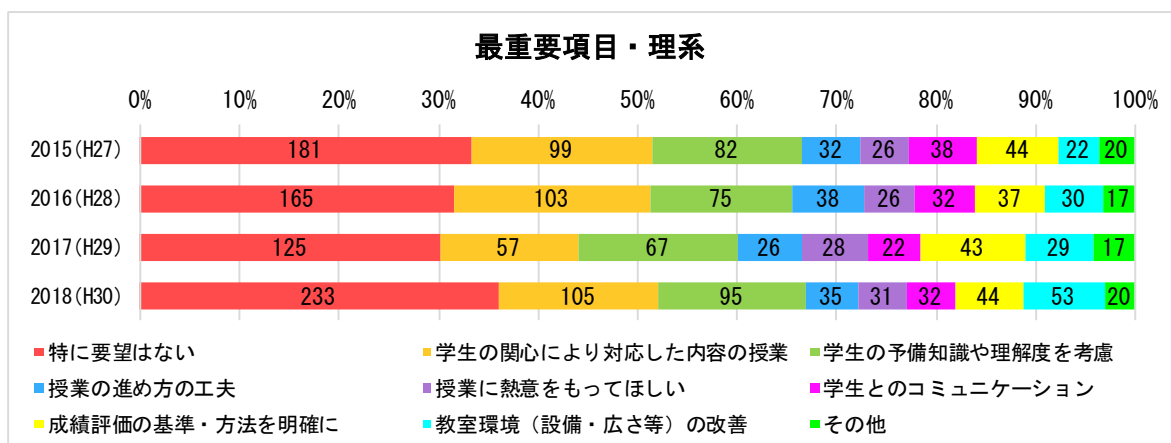


Q.51 Q.50 で選択したもののうち、最も重要なものを選んでください。

- ①特に要望はない ②学生の関心により対応した内容の授業をしてほしい
 ③学生の予備知識や理解度をもっと考慮してほしい ④授業の進め方をもっと工夫してほしい
 ⑤授業にもっと熱意をもってほしい ⑥学生とのコミュニケーションをもっとしてほしい
 ⑦成績評価の基準・方法をもっと明確にしてほしい ⑧教室環境(設備・広さなど)を改善してほしい
 ⑨その他(記述回答)

< 図 5 3 >





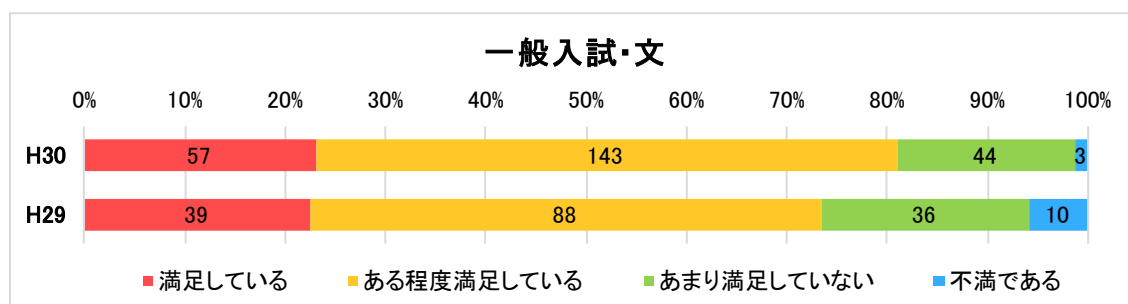
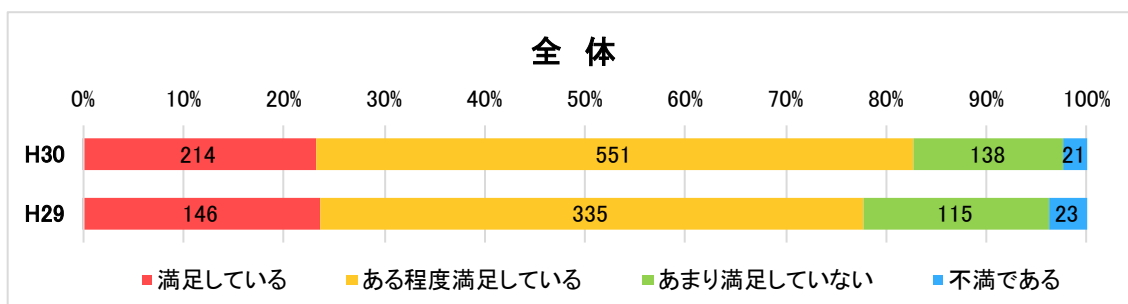
この項目についても毎年質問して、経年変化をみている。図 52 は改善要望を複数回答で尋ねた結果の度数分布を示している。全体としては「特にない」の回答数をもっとも多い。理系では「特にない」以外の項目でも多くの要望があり、学生の関心や理解度に考慮をもとめる要望や、成績評価に関する要望が多数ある。文系では、昨年と比較して「授業の進め方の工夫」と「教室環境の改善」が多くなった。

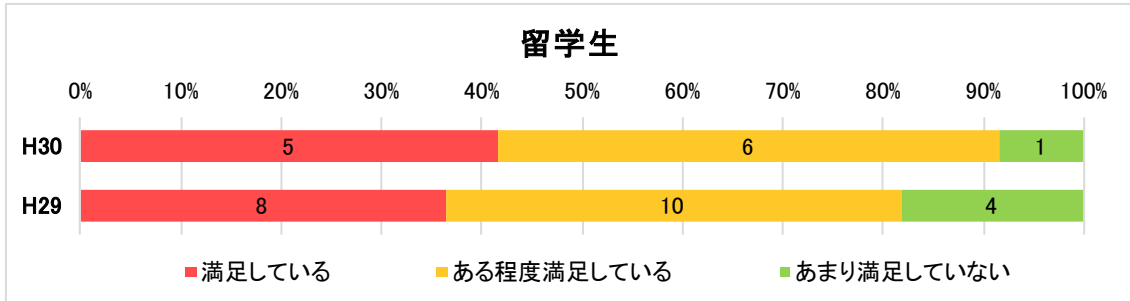
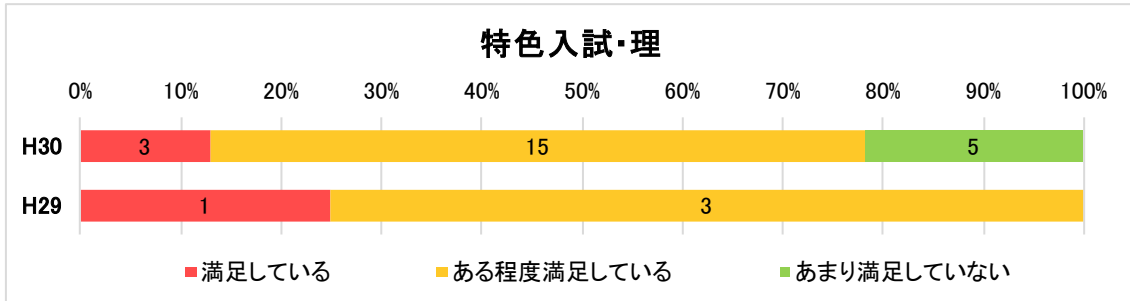
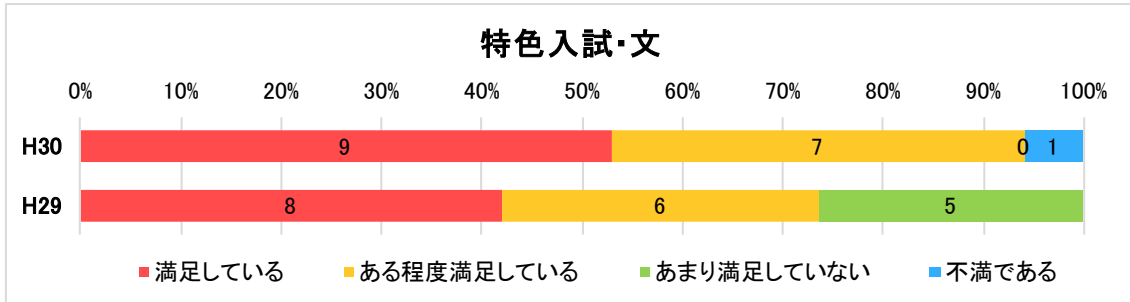
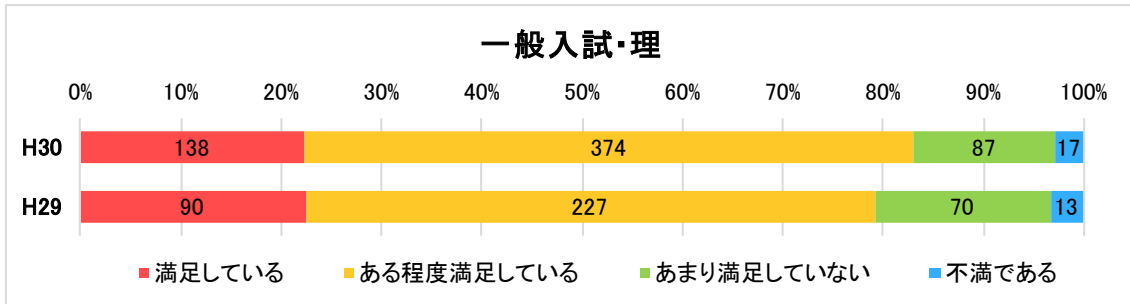
図 53 は、要望の中で最重要な項目と指摘された項目の割合を、2015 年から 4 年間について図示したものである。昨年は、文系、理系とも「成績評価の基準・方法を明確に」の要望が増加する（全体：7.4%→6.5%→10.1%）傾向にあった。また、前述 Q.31、Q.32 での成績評価への納得度と納得できない理由の質問でも、基準の明確化や公正性をもとめる声が増加していた。今年は文系で「教室環境の改善」が多くなったのが特徴であり、大人数授業が多いことが影響している可能性がある。

Q.52 この 1 年間に受けた全学共通教育を総合的に判断して、学んだことに満足していますか。

- ①満足している ②ある程度満足している ③あまり満足していない ④不満である

< 図 5 4 >





アンケートの最後に、1回生の1年間に受けた教養・共通教育を振り返っての満足度を尋ねた。図 54 には、入試区分別に昨年と今年の結果を比較して記載したが、毎年ほとんど同じ傾向を示している。「満足している」+「ある程度満足している」の肯定的意見は全体で 83%（昨年 78%）あり、高いレベルにあると言える。一般文系 81%（昨年 73%）よりも一般理系 83%（昨年 79%）の方が満足度はやや高いという結果であるが、どちらも満足度としては昨年より向上している。特色入試文系ならびに留学生の区分で「満足している」の割合が 40~50%と大きいことは好ましい結果である。ただし、特色入試理系の区分で、一般入試理系よりも低めの結果が出ているのは気がかりな結果である。

次に、学生の満足度に影響を与える因子を検討するため、他の質問項目との関連を調べて表 6 に掲載した。この解釈にはいろいろな見方ができるが、3.2 以上の高い満足度を与える項目（満足度の全体平均値は 3.06）と、関連を調べた各項目で①→④（⑤）の高位→低位により満足度が明確に減少する項目に

着目した。このような観点からすると、「学習意欲」、「専門との一致度」、「成績評価に対する納得度」の3項目では、高位の①で3.2~3.3の高い満足度を示し、かつ下位の群になるに従って、明確に満足度が低下していく。これらの項目の基盤となっているであろう「志望」の項目においても、やや変化は緩慢になるものの同様の傾向が見られる。一方、「単位数」、「正課授業時間」、「授業時間外学習時間」の項目とは相関がみられるもののやや弱いという結果である。

強い学習意欲が学習行動を伴って満足度に繋がるということは予想できることであるが、「成績評価に対する納得度」も学生が満足感を得るために強い効果をもつことが認められた。

前章で述べたように、学生の意識としては2回生進級時の満足度が、卒業時アンケートにおける全学共通教育での向上感と強い相関があることから、大学生活を通じて全学共通教育に対する最終評価に繋がるものと思われる。

$$\text{満足度} = 4 \times \text{①満足している} + 3 \times \text{②ある程度満足している} + 2 \times \text{③あまり満足していない} + \text{④不満である}$$

<表6>

	志望 Q.04	一致度 Q.06	意欲 Q.09	単位数 Q.22	成績納得度 Q.31	正課授業 Q.36	授業外学習 Q.40
①	3.17	3.23	3.30	3.15	3.28	3.10	3.10
②	3.10	3.02	3.11	3.14	2.95	3.19	3.10
③	3.00	2.82	2.98	3.03	2.71	3.02	3.12
④	2.90	2.74	2.86	2.86	2.38	3.02	3.07
⑤			2.82	2.71		3.00	2.93

注) 満足度の平均値は 3.06、表中①~④ (⑤) の回答群の意味は以下に記載の通り

Q.04 志望 (①: はっきり決めていた、②: だまかには決めていた、③: いくつかあったが、どれとは決めていなかった、④: あまり決めていなかった)

Q.06 一致度 (①: よく一致している、②: まあ一致している、③: どちらかというとは一致していない、④: あまり一致していない)

Q.09 意欲 (①: 非常に意欲あり、②: まあまあ意欲あり、③: どちらともいえない、④: あまり意欲なし、⑤: まったく意欲なし)

Q.22 単位数 (①: 単位 ≥ 65、②: 65 > 単位 ≥ 60、③: 60 > 単位 ≥ 55、④: 55 > 単位 ≥ 50、⑤: 50 > 単位 ≥ 40)

Q.31 成績納得度 (①: 納得している、②: どちらかといえば納得している、③: どちらかといえば納得できない、④: 納得できない)

Q.38 正課授業時間 (①: 6.5h 以上 (10h は除く)、②: 5.5~6.0h、③: 4.5~5.0h、④: 3.0~4.0h、⑤: 2.5h 以下)

Q.42 授業時間外学習時間 (①: 3.0h 以上 (8h 以上は除く)、②: 2.0~2.5h、③: 1.5h、④: 1h、⑤: 0.5h)

12. まとめ

昨年度より2回生進級時アンケートの内容を抜本的に改訂した。従来のアンケートの一部を継承して経年変化の追跡を可能にしながら、入試種別、学部別の解析群を設定し、全学、文系、理系の括りの他、必要に応じてより細かな解析区分を採用することにより学生動向の要因についての手がかりを得る形式にした。また、アンケートの本来の目的である教育改善に資するという観点を強く意識して解析することにした。本年度のアンケート結果は、多くの点で昨年と同様の傾向を示しているが、学生の学習行動や生活実態には大きな慣性があり、年により大きく変化することはない。しかし、変化の傾向を把握することは今後を予測するために重要であり、それにも増して、慣性の中にある教育的な問題点を把握し、改善のきっかけを掴むことが重要である。

アンケートの設問をする段階で想定していたように

志望意識 → 学習意欲 → 学習行動 → 学習成果 → 向上感（満足度）

のスキームは、今回の結果を見ても確かに成立している。教育効果の向上を図るためにはこの正しい流れを維持し拡大する施策を行うとともに、問題点を早期に把握して負のスキームになる芽を摘み取る努力がもとめられる。本年度のアンケート結果からは、次のような点を指摘することができる。昨年度と共通の点が多数あるが、以下に列挙する。

- ・入学時、将来活躍したい分野（志望）についての学生意識は学部により大きな差があるが、入学後のさまざまな経験から次第に自身の将来像が明確になる傾向が見られる。それに伴い志望意識と専門との一致度も次第に改善している。しかしながら入学後の学習意欲の低下は深刻である。今回も、学部により低下度の差が見いだされたことから、各学部で教育体系、カリキュラムの再点検をされるとともに、将来に向けた学習の動機付けとなる情報を、入学前後に学生に積極的に提供されることも必要である。
- ・特に新入生にとって、生活環境の激変や大学での授業、1回生前期のカリキュラム、各学部での履修指導ガイダンスは、学習意欲に強い影響を与えていることが推測される。今年の調査で表れた2回生進級時の学習意欲の回復は好ましい傾向であり、各学部でのガイダンス効果と推察している。
- ・外国人講師による英語授業、E科目の設定等、英語教育の改革が進められているにも関わらず、英語能力に向上感をもてない学生が多い。現状からもう一步踏み込み、向上感をもてる英語学習を実現するための努力がもとめられる。
- ・ILASセミナーは例年高い評価を得ている。抽選に外れて受講できない学生を少なくする対策を講じることが、最近、75%程度で高止まりしている受講許可率を上げることに効果的である。
- ・今年から取得単位数の質問を70単位以上まで拡大した結果、1回生単位取得の全体像が明らかにできた。その結果、文系・理系とも過半数の学生が1回生で60単位以上を取得しており、学部格差も著しい。この状況は明らかに過剰履修であり、卒業単位数、標準修業年数からみても異常状態にある。カリキュラム、履修指導、CAP制等を再度検討し、速やかに改善策を講じる必要がある。特に、平成30年度から実施の機関別認証評価において、「履修登録科目に関する単位の上限の設定（CAP制）等について、適切であるか」が問われていることから、早急な是正が求められる。
- ・成績評価について、評価基準の明確性、公平性をもとめる声が理系学生で大きくなっている。成績評価の基準や科目間・クラス間の不公平感を改善することが求められる。これはGPA制度の導入が教育改革に資するとされた主要な論点の一つである。

- ・1回生で運動時間が不足している学生が多く、健康管理についてガイダンス等でより強くアピールすることが必要である。また、本学の環境や運動施設は貧弱と言わざるを得ない。将来のキャンパス計画の議論に本アンケートの結果を提供されたい。
- ・かねてから言われているように、授業外学習時間が明らかに不足している。授業科目数や取得単位数を増加させることよりも、自習を喚起する授業を推進することが、教育の量から質への転換を促し、教育効果を上げる道筋になると思われる。
- ・教養・共通教育への満足度は、「学習意欲」と「成績」のみならず、「成績評価への信頼性」から形成される。教育改善の議論においては、この点にも注意を払うべきである。
- ・Q.63の改善要望の自由記述において、履修制限と抽選制度に対する意見が多数寄せられた。教育効果を考えるとクラスサイズが過大にならないように一定の定員を設けることは避けられないが、不満を招く一つの大きな要因は、いわゆる楽勝科目という風評により履修者が一部科目に殺到し、本当にその科目を受講したい学生が履修できないという事態にある。各授業の到達目標の設定、成績評価の在り方、授業外学習の組み入れ等、授業担当教員がシステムとしての問題を共有し、共通の認識の下に改善に取り組むことが要望されている。

第5章 大学教育での向上感 において設けた Q.12~Q16 の質問は、各学部におけるカリキュラムポリシーやディプロマポリシーに掲げられている内容である。2回生進級時アンケートは、入学後の一つの通過点でのモニターという位置づけにある。

今年度より卒業時アンケートに「全学共通科目の学習を振り返って、入学当初と比べてどの程度向上したと又は得られたと思いますか？」との質問が加えられ、大学教育4年間の総括としての学生意識を調査することができた。その結果を5章と10章に参考のために掲載している。5章で示したように、「専門以外の幅広い知識と教養」の項目について類似の設問に対する回答は、2回生進級時においても卒業時においても、ほぼ同じ結果であった。入学当初の期待度と比較すると実現度(向上感)はやや低下するが、卒業時における全学共通科目の学習に対する意見で、「大いに向上した(得られた)」+「ある程度向上した(得られた)」の肯定的回答は70~80%のレベルにあり、概ね良好な評価と言えるだろう。このように、2回生進級時の全学共通教育に対する満足度が卒業時においても保持され、大学生活全体を通じた印象、評価に繋がることが示唆されている。

なお、本アンケートで示唆された重要項目については、教務データ等のより正確な資料をもとに検証した上で、アンケートの指摘が事実であれば具体的な対策を講じられるように切に願うものである。

今後は今回判明したアンケート調査の欠点を改善し、さらに提出率を上げる方策を考えながら実施していきたい。今年是一部学部のガイダンスにて積極的な協力をいただき、また関係者にもご努力をいただいた結果、回答率を10ポイント以上改善することができた。

最後に、長文のアンケートに耐えて回答し貴重なデータを提供していただいた学生諸君に厚く御礼を申し上げる。また、膨大なデータを的確に解析していただいた国際高等教育院事務部の皆様に感謝を申し上げておきたい。

平成 30 年度 2 回生進級時アンケート (H29 年度入学生)

(実施期間 : 2018/04/02 - 2018/06/06)

・実施要項 (PDF ファイルにて表示、以下内容)

- * 本アンケートは記名式で行います。
- * 有効回答のなかから抽選で粗品を進呈いたします。
- * 回答結果は、個人が特定できる形での公表はしません。
- * なお、学生番号と氏名は大学から当選者への連絡・確認に使用します。
- * 本調査は、入学後 1 年間の大学生活を振り返って、京都大学の教育、特に教養・共通教育に対してどのように取り組み、どのような感想を抱いているか、について 2 回生進級時点での意識調査を行い、今後の京都大学の教育を改善・充実するための基礎資料にすることを目的としています。
- * あなたの昨年度 1 年間を振り返って回答してください。

Q.01 あなたが京都大学に入学した入試区分を選択してください。

- ①一般入試 (文系) ②一般入試 (理系) ③特色入試 (文系) ④特色入試 (理系)
⑤外国人留学生特別選抜

Q.02 あなたの学部を教えてください。

- ①総合人間学部 ②文学部 ③教育学部 ④法学部 ⑤経済学部 ⑥理学部 ⑦医学部 (医学科)
⑧医学部 (人間健康科学科) ⑨薬学部 (薬学科) ⑩薬学部 (薬科学科) ⑪工学部 ⑫農学部

Q.03 あなたが入学したとき、自分が将来活躍したい分野 (希望分野) を決めていましたか。

- ①はっきり決めていた ②大まかには決めていた ③いくつかあったが、どれとは決めていなかった
④あまり決めていなかった

Q.04 今現在、自分が将来活躍したい分野 (希望分野) を決めていますか。

- ①はっきり決めている ②大まかには決めている ③いくつかあるが、どれとは決めていない
④あまり決めていない

Q.05 入学してから現在までに、その希望分野は変わりましたか。

- ①変わっていない ②変わった

Q.06 現在のあなたの希望分野と学部でこれから学ぼうとする専門分野は、どの程度一致していますか。

- ①よく一致している ②まあ一致している ③どちらかという一致していない
④あまり一致していない

Q.07 入学当初から現在までに、あなたの学習意欲はどのように変化しましたか。各時期について、次の 5 つから選択してください。なお、この質問は Q.7~Q.11 (入学当初、前期半ば、後期開始、後期半ば、現在) まであります。

<入学当初の時期>

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.08<前期半ばの時期>

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.09<後期開始の時期>

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.10<後期半ばの時期>

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.11<現在>

- ①非常に意欲あり ②まあまあ意欲あり ③どちらともいえない ④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.12 入学後1年間の授業を受けて、人間社会や自然についての幅広い視野と教養は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.13 1年間で、あなた自身が問題を発見し、論理的に解決法を考える力は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.14 1年間で、自分の考えを表現し、相手の意見を理解するコミュニケーション能力は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.15 1年間で、自ら考え、主体的に行動する能力は、どの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.16 1年間で、あなたの英語の能力はどの程度、向上したと思いますか。

- ①大いに向上した ②ある程度向上した ③あまり向上しなかった ④全く向上しなかった

Q.17 1回生でILASセミナーを履修しましたか。

- ①履修した ②予備登録をしたが履修しなかった ③予備登録をしなかった

Q.18 Q.17で「履修した」を選んだ方へ：セミナーで学習した知識や経験について満足していますか。

- ①とても満足している ②どちらかという満足している ③どちらかという満足していない
④満足していない

Q.19 Q.17で「予備登録をしたが履修しなかった」を選んだ方へ：履修しなかった理由は何ですか。

- ①抽選に外れてしまった ②希望順位の低い科目だったのでやめた ③履修できない曜日・時限だった
④何度か授業に出たが興味をもてなかった ⑤何度か授業に出たが他の活動と両立できなかった
⑥その他（記述回答）

備考：その他（記述回答）上限 20 文字まで。

Q.20 Q.17で「予備登録をしなかった」を選んだ方へ：予備登録をしなかった理由は何ですか。

- ①履修したいと思わなかった ②空いている曜日・時限に希望する科目がなかった
③予備登録に間に合わなかった、または忘れた ④忙しくて履修できそうになかった
⑤その他（記述回答）

備考：その他（記述回答）上限 20 文字まで。

Q.21 スポーツ実習 IA・IB、物理学実験、基礎化学実験、生物学実習 I・II・III、地球科学実験のうち、1回生で履修した科目にチェックをつけてください（複数可）。いずれも履修しなかった人はチェックをせずに次の質問へ進んでください。

- スポーツ実習 IA スポーツ実習 IB 物理学実験 基礎化学実験 生物学実習 I
生物学実習 II 生物学実習 III 地球科学実験

Q.22 あなたは1回生の間に何単位を取得しましたか。全学共通科目に加えて、専門基礎科目、専門科目を含む合計を、1回生終了時に受けとった成績表で確認してお答えください。

- ①単位 \geq 70 ②70>単位 \geq 65 ③65>単位 \geq 60 ④60>単位 \geq 55 ⑤55>単位 \geq 50
⑥50>単位 \geq 45 ⑦45>単位 \geq 40 ⑧40>単位 \geq 35 ⑨35>単位 \geq 25 ⑩25>単位

Q.23 Q.22について、その取得単位数のうち、全学共通科目について「前期」の取得単位数はどれくらいですか。

- ①単位 \geq 40 ②40>単位 \geq 35 ③35>単位 \geq 30 ④30>単位 \geq 25 ⑤25>単位 \geq 20
⑥20>単位 \geq 15 ⑦15>単位

Q.24 Q.22 について、その取得単位数のうち、全学共通科目について「後期」の取得単位数はどれくらいですか。

- ①単位 \geq 40 ②40>単位 \geq 35 ③35>単位 \geq 30 ④30>単位 \geq 25 ⑤25>単位 \geq 20
⑥20>単位 \geq 15 ⑦15>単位

Q.25 1 回生の間に単位を取得した「人文・社会科学科目群」の科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。

- ①ほぼ 100% ②約 80% ③約 60% ④50%以下

Q.26 1 回生の間に単位を取得した「自然科学科目群」の科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。

- ①ほぼ 100% ②約 80% ③約 60% ④50%以下

Q.27 1 回生の間に単位を取得した「外国語科目群」の英語科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。

- ①ほぼ 100% ②約 80% ③約 60% ④50%以下

Q.28 1 回生の間に単位を取得した「外国語科目群」の初修外国語科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。

- ①ほぼ 100% ②約 80% ③約 60% ④50%以下

Q.29 あなたの 1 回生（前期＋後期）終了時の GPA はどのレベルですか。1 回生終了時に受けとったあなたの成績表で確認してお答えください。

- ①GPA \geq 4.0 ②4.0>GPA \geq 3.5 ③3.5>GPA \geq 3.0 ④3.0>GPA \geq 2.5 ⑤2.5>GPA \geq 2.0
⑥2.0>GPA \geq 1.5 ⑦1.5>GPA

Q.30 あなたが 1 回生後期（2016 年 12 月）に受けた TOEFL-ITP のスコアはどのレベルでしたか。

- ①スコア \geq 550 ②547 \geq スコア \geq 503 ③500 \geq スコア \geq 450 ④447 \geq スコア

Q.31 1 回生時の全学共通科目の成績評価についてお尋ねします：全体として自分の成績評価に納得していますか。

- ①納得している ②どちらかといえば納得している ③どちらかといえば納得できない
④納得できない

Q.32 Q.31 で「どちらかといえば納得できない」又は「納得できない」を選んだ方へ：成績評価に納得できなかった理由は何ですか。次の中からあてはまる全てのものにチェックをつけてください。

- ①成績評価が厳しすぎる ②成績評価が甘すぎる
- ③成績評価の基準や方法が学生に対して明確に示されていない
- ④成績評価の基準や方法が不公平である ⑤その他（記述回答）

備考：その他（記述回答）上限 20 文字まで。

Q.33 Q.32 で選んだもののうち、最も重要なもの 1 つを選択してください。

- ①成績評価が厳しすぎる ②成績評価が甘すぎる
- ③成績評価の基準や方法が学生に対して明確に示されていない
- ④成績評価の基準や方法が不公平である ⑤その他

Q.34 平均して 1 週間に何時間程度、運動（スポーツ、散歩、ジョギング、サイクリング等）をしていますか。

- ①ほぼ 0 から 1 時間程度 ②2～3 時間程度 ③5 時間程度 ④7 時間程度 ⑤10 時間程度
- ⑥15 時間程度 ⑦20 時間程度 ⑧25 時間程度 ⑨25 時間以上

Q.35 あなたは、1 回生のときに運動系のクラブやサークルに入っていましたか。

- ①入っていた ②一時、入っていたが止めた ③入っていない

授業期間中のあなたの平均的な一日（休祝日を除く月曜日～金曜日）における、Q.36～Q.41 の活動時間を教えてください。なお、活動時間の項目は、＜正課の授業出席時間＞＜通学時間＞＜クラブ・サークル等の課外活動時間＞＜アルバイトの時間＞＜授業の予習・復習・レポート作成等の時間＞＜授業とは直接関係のない学習や読書の時間＞ です。 *プルダウンメニューにて選択

Q.36 <正課の授業に出席する時間>

Q.37 <通学に要する時間>

Q.38 <クラブ・サークル等の課外活動時間>

Q.39 <アルバイトに要する時間>

Q.40 <授業の予習・復習・レポート作成等の時間>

Q.41 <授業とは直接関係のない学習や読書の時間>

Q.42 あなたは入学当初、全学共通科目に対してどのようなことを期待していましたか。

次の各項目について教えてください：

あなたは入学当初、全学共通科目において「専門以外の幅広い知識・教養」を得ることを期待していましたか。

- ①期待していた
- ②どちらかといえば期待していた
- ③どちらかといえば期待していなかった
- ④期待していなかった

Q.43 あなたは入学当初、全学共通科目において「専門分野で基礎となる学力」を得ることを期待していましたか。

- ①期待していた
- ②どちらかといえば期待していた
- ③どちらかといえば期待していなかった
- ④期待していなかった

Q.44 あなたは入学当初、全学共通科目において「実用的な知識・技能」を得ることを期待していましたか。

- ①期待していた
- ②どちらかといえば期待していた
- ③どちらかといえば期待していなかった
- ④期待していなかった

Q.45 あなたは入学当初、全学共通科目において「コミュニケーション能力」を得ることを期待していましたか。

- ①期待していた
- ②どちらかといえば期待していた
- ③どちらかといえば期待していなかった
- ④期待していなかった

Q.46 あなたは入学当初、全学共通科目において「教員との交流」を期待していましたか。

- ①期待していた
- ②どちらかといえば期待していた
- ③どちらかといえば期待していなかった
- ④期待していなかった

Q.47 あなたは入学当初、全学共通科目において「学生どうしの交流」を期待していましたか。

- ①期待していた
- ②どちらかといえば期待していた
- ③どちらかといえば期待していなかった
- ④期待していなかった

Q.48 あなたは入学当初、全学共通科目において「将来の研究分野や進路を決める手がかり」を得ることを期待していましたか。

- ①期待していた
- ②どちらかといえば期待していた
- ③どちらかといえば期待していなかった
- ④期待していなかった

Q.49 全体として、あなたが全学共通科目に対して抱いていた期待は実現されましたか。

- ①実現された
- ②どちらかといえば実現された。
- ③どちらかといえば実現されなかった。
- ④実現されなかった。

Q.50 今後の全学共通科目に対して、どのような改善を要望しますか。あてはまるものすべてにチェックをつけてください。

- ①特に要望はない ②学生の関心により対応した内容の授業をしてほしい
- ③学生の予備知識や理解度をもっと考慮してほしい ④授業の進め方をもっと工夫してほしい
- ⑤授業にもっと熱意をもってほしい ⑥学生とのコミュニケーションをもっととってほしい
- ⑦成績評価の基準・方法をもっと明確にしてほしい ⑧教室環境(設備・広さなど)を改善してほしい
- ⑨その他(記述回答)

備考：その他(記述回答) 上限 20 文字まで。

Q.51 Q.50 で選択したもののうち、最も重要なものを選んでください。

- ①特に要望はない ②学生の関心により対応した内容の授業をしてほしい
- ③学生の予備知識や理解度をもっと考慮してほしい ④授業の進め方をもっと工夫してほしい
- ⑤授業にもっと熱意をもってほしい ⑥学生とのコミュニケーションをもっととってほしい
- ⑦成績評価の基準・方法をもっと明確にしてほしい ⑧教室環境(設備・広さなど)を改善してほしい
- ⑨その他

Q.52 この1年間に受けた教養・共通教育を総合的に判断して、学んだことに満足していますか。

- ①満足している ②ある程度満足している ③あまり満足していない ④不満である

Q.53 最後に、今後の教養・共通教育の改善点や要望があれば、要点を簡潔に記入してください。良かったこと、感動したこと、印象等でも結構です(自由記述・500文字制限)。

備考：質問はここまでです。



2018（平成30）年度2回生進級時アンケート報告書

平成30年10月 発行

編集 京都大学国際高等教育院

発行 京都大学国際高等教育院

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

Tel 075-753-6690/6513
